が彼の住居であつた。彼は、現在の戰爭が帝國主義の戰爭であり、口舌でなしに××××××するのがプロレタリアの良心であり、勞働階級が起つて凡ての××帝國主義者を××するまで、勞働者は××××××はならぬ。――といふこと說くためにプロレタリアの一人一人を追ひ廻してゐた。』

レニンの外國生活に就いては、更に舊國會議員で戰爭反對の廉で流刑に處せられた、現ウクライナ中央執行委員會議長ペトロフスキーも次のやうに語つてゐる。

『一九一二――一三年の頃、カルパト山麓のポロニノ村にゐたレニンとジノヴィエフは、中央委員會の財源のことで相談した。若し黨が金策しえなければ凡ての活動を止めるばかりか、レニンとジノヴィエフとは運動の仕事をすて、他に收入の道を求めねばならなかつた。しかもドイツやフランスでは警察の警戒が嚴重で住むことができぬから、働きロをロシア國境に遠い、運動の指導に不便な英國に求めねばならなかつた。

ナデジダ・コンスタンチノヴナは、金策のために連日心を碎いた。彼女は我々の食事を作りながら黨の中央委員會の秘書の仕事をしてゐた。彼女の手は文字通り雜役夫の手そのまゝであつ

た。肉體的な重い仕事が彼女を苦しめた上に、彼女はロシアの勞働運動との連絡を一手に引き受け、文書の往復整理をやつてゐたのである。

實際、もし黨が資金を調達しえなかつたとしたら――イリイッチは運動から放れなければならない。が、彼は決して自分の著作をブルジョア的な新聞にも雜誌にも載せなかつた。かうした自重は誰にでも出來るものではない。

彼は毎日の仕事を嚴格に時間に割り當てゝ、その中から食事と休養とに非常な僅かの時間をさき、殘りの全時間を深夜まで仕事に宛てゝゐた。當時、劇場や之に類する娯樂などは思ひもよらなかつた。』

レニンは當時、ブルジョアジーの幇間たる戰爭防衛派と鬪つたばかりではない。其の頃の社會主義者中には、中間的態度をとつて右に左に動搖し、一定の立場を表明し得なかつた連中が少なからずあつた。レニンは平素からこうした日和見主義者を公然の敵以上に手ひどく攻擊した。

彼は一九一五年七月廿七日「帝國主義戰爭における自國政府の敗戰について」といふ論文をかき、先づ、セムコフスキイの如き公然たるメンシェヴィキに對し、第二には後に全くボリシェヴィキの

味方になつたトロツキーに對して鋒鉾を向けたのである。レニンはトロツキーの意見の有害さをこの書で言ふことを欲しないだろうが、彼は當時トロツキーの論文を「駄法螺の標本」と呼んでゐた。

レニンに從へば「トロツキーは徒らに言葉を分析して混迷してゐる。彼にとつてはロシアの敗戰を希望することは、取りも直さず、獨逸の勝利を希望するものだと思はれた。」――のである。

レニンは「非勝利、非敗戰」說を無遠慮に嘲笑した。

『如何に困難であらうとも、それが唯一のプロレタリア的社會主義的任務たる勞働階級の××××××××××××××××可能を「信ぜず」して、其の發展を援助することを避けつゝ、非勝利非敗戰の標語に加擔する者は、事實において、ブルジョアジーの味方であり、日和見主義者の味方である。殊に參戰列强中の最後進國たるロシアのプロレタリアは、ドイツ及びフランス社會民主黨の破廉恥な變節に對して、當然、現在の慘忍、野蕃、飢餓、野獸の世界より人類を救出し、之を全ヨオロッパの××、××××××××××平和に導くために、自國政府の××××××××××ことを、任務とすべきである。』

二　三月革命

一　再び故國へ

一九一七年のレニンのロシア歸還については、有ゆる虚説が流布された。ブルジョア新聞やメンシェヴィキ及び社會革命黨（エス・エル）の新聞は、恰かも、レニン、ジノヴィエフ、ラデック等が獨逸政府の援助でロシアへ向つたやうに報じた。當時、事ごとにいかに彼等がボリシェヴィキを迫害したかは、誰でも記憶してゐる。我々はレニンが乘つて來た所謂「封印列車」の旅行について、實見者の追憶を聽かう。ジノヴィエフは之について「レニンの生涯の小記錄」のうちに、次のやうにいつてゐる。

『三月革命が耳朶をうつた。レニンはロシア行に熱中した。けれども國際ブルジョアジイは、もし彼がロシアへはいれば、ロシアの革命的勞働階級の首腦となることを知つて、彼をロシアへ放すことを欲しなかつた。ミリュコフ（當時の外務大臣）は、英佛政府との間に、レニンでも

誰でも、ボリシェヴィキは一人もロシアへ入れないといふ協約を結んだ。我々は冒險が伴はうとも愚圖々せずに何とか考案しなければならなかつた。その時、レニンは、ある眠られぬ夜中、スエーデン人の旅券でスエーデン經由の入國を決心した。必要な書類がすべて注文された時、その仕事を擔當してゐた者は「皆さんはスエーデン語を知つてゐますか？」と聞いた。我々は一言のスエーデン語をも解しないことを承認せねばならなかつた。レニンは、そこで思ひついて言つた。――「我々はみんな啞者にならう。」――だが「そんな芝居はうまく行かぬ！」といふ意見が勝つた。とう〳〵長い間のあて途もないロシアへ！　の途をもとめた後、レニンは非常に危險な、然したゞ一つ我々の前に殘されてゐた血路――即ち當時ロシア政府と對戰中の獨逸を經て乘込むといふことを提議した。我々が敵國を經由して祖國へ乘り込んだら、どんな壓迫が起るだらうかといふことは、よく判つてゐた。けれども他には如何なる方法もなかつたのだ。そこでカール・リープクネヒト等の獨逸共產黨員と交渉し、フランス、スウイス、スエーデン等の共產黨員を呼びあつめて、萬國勞働階級の前に公明を立證するための記錄をつくり、もしカイゼル政府が通過させたらドイツを經由するといふことにきまつた。ドイツ政府は通過を許

した。ドイツは、もしボリシェヴィキがロシアへ入れば彼等にとつて利益だと考へた。(彼等があとで自分の迂濶を後悔したことは今では明瞭である)――彼等と我々ロシア人との間に物凄いばくちが行はれた譯だ。彼等はロシア政府を弱めるために役立つものは、すべて彼等を利するものだといふ考へで遠くを顧る暇がなかつたのだ。結局、スエーデン國境まで有名な「封印列車」がドイツ政府から提供された。當時、この列車は贅澤なものだといふ風に書かれたけれども、實はかなりに汚ない、南京虫が車中の隅々まで占領してゐたものだつた。然し、こんな列車でも我々にとつては限りなく有難かつた。我々は封印された。我々と一緒に數名のスウイスの同志がロシアへ向つた。途中、ドイツの社會民主黨員が會見を申込んだが、レニンは、若し侮辱を受けたくないなら、列車の中へは入らない方がいゝと彼等に傳へさせた。そして「我々は全世界に知れ渡つてゐるやうな理由で君達の政府の便宜を蒙つてゐるが、君達、社會民主黨とは何の交渉もない」と、ブツ放した。とう〳〵芬蘭國境へやつて來た。レニンは道ぢう「我々は眞すぐ監獄へ乘つけるんだ!」といつてゐた。ペトログラードへ着くとすぐ、我々は全部賣國奴として裁判される爲に、ブルジョア臨時政府の手で捕縛されるものと彼は信じきつてゐた。

セストロレツカヤ驛に着いて、非常な歡喜をもつて我々を迎へる革命的勞働者の群れを見た時の我々の意外はどうであつたらう。汽車はペトログラードの芬蘭停車場構内に入つた。レニンは監獄へは送られないで。ペトログラド勞働階級の歡呼の目標となつた。けれども、レニンはいつでも、あまり樂觀家ではなかつた。盛な歡迎も彼の今までの樂觀說を飜へさせはしなかつた。彼は殆んど毎晩のやうに「さあ今日は監獄へ投げ込まれなかつた、さうするとあしたかな」——と言つた。やがて白色新聞や雜誌の我々に對する追窮がはじまり、我々が封印列車で乘り込んだことを無遠慮に攻擊した。遂に當時メンシェヴィキの掌中にあつた勞兵會執行委員會は、我々を召喚した。我々を三時間も待たせた後に、會議を終つたチヘエゼが其の配下と共に現はれて、どういふ譯でドイツ經由で乘込んで來たかを根ほり葉ほり訊問しはじめた。我々は已れを被告として承認する代りに彼等を被告扱ひにし、主客顚倒の觀を呈した。結局、メンシェヴィキの執行委員會は、我々が獨逸を經由したことの公明さを證明する決議を、自分達の「官報」に載せ、ボリシェヴィキに對する非難は何の根據もないといふことを、證言しなければならない事になつた。』

一九二四年四月十六日の「プラウダ」紙上で、ジノヴィエフはさらに興味あるロシア歸還に關する詳細を掲載してゐる。讀者は非常に興味あるこの瞬間について、長々しい引用を咎めないであらう。

『ベロオトロフ驛（フインランド國境）に近づくと、昂奮はます〳〵高まつて來た。そこでは、官憲はかなり好意をもつて我々を迎へた。停車場司令官を勤めてゐたケレンスキイ派の將校の一人は、ウラジミル・イリイッチに向つて分列式をさへ行つた。

近親者が我々を出むかへに來た。その中にはカメネフ、スタァリンその他の同志がゐた。蠟燭の灯で照らされたうす暗い狹い車室で最初の意見交換が行はれた。イリイッチは同志達にいろ〳〵な質問を浴せかけた。

「我々はペテルブルグですぐ捕縛されるだらうか？」

出迎へた親友達はそれにはハッキリと答へずに、謎のやうに微笑してゐた。途中、セストロレッカヤ驛に近い小驛で多數のプロレタリア群がレニンを胴上げした。彼は最初の簡單な祝辭演說をした。

ペテルブルグのフィンランド停車場のプラットホォム、既に夜である。此時になつて我々は親友達の謎の微笑を了解することができた。イリイッチを待つてゐたのは、捕縛ではなくて凱歌であつた。停車場に近い廣場は歡迎の灯で一杯であつた。歩廊には各種類の兵器をそろへた儀仗兵の長い鎖がつゞいた。停車場前の廣場近くの町々は、歡喜と共に自分達の首領を迎へる幾萬の勞働者ではち切れさうであつた。「インタナショナル」の歌が響きわたつた。數限りなき勞働者と兵卒の群は熱狂に燃へてゐた。

數秒の間イリイッチは文字どほりに「行列を縫は」ねばならなかつた。いはゆる「皇帝室」でチヘエゼはじめソヴエトの全代議員が彼を待つてゐた。狸爺チヘエゼは、「革命的民主黨」を代表してウラジミル・イリイッチを祝福し「希望」を述べた。イリイッチは眉ひとつ動かさず、一言一句「尊敬すべき革命的民主黨」の面皮を剝ぐやうな言葉を逆らせた短かい演説をもつてそれに答へた。演説は「×××萬歳」の叫びで結ばれた。その瞬間、おそろしい人波が闖入した。我々は波濤の中の木片だといふ印象をうけた。波濤はウラデミル・イリイッチを摑まへて裝甲自動車にのせた。彼は裝甲自動車で革命の首都への最初の乘込みをやつたのである。自動

車は犇々と果てしなき勞働者と兵卒の隊列の垣を縫つて走つた――大衆の中へ社會××の標語を投げかけ、簡單な演說をやりながら！

一時間のゝち、我々はうち揃つて、ボリシエヴイキ派が殆んど全部集まつてゐたクシェシンスカヤ宮殿へ乘りつけた。同志達の演說は朝までつゞいた。最後に、イリイツチが答辭を述べた。早曉、我々は愉悅とゝもに故國ペテルブルグの大氣を吸ひつゝ散會した。數年間も絕えて見なかつたネヴァ河をわたつて行つた。イリイツチは生々と快活である。すべての者にたいして彼は滿足であつた。彼は皆なの連中を覺えてゐた。』

二　レニン夫人の追憶

ナデジダ・コンスタンチノヴナ（レニン夫人）は、歸還七週年の今日、はじめてロシア歸還についての追想を「プラウダ」紙上に書いてゐる。

『最後の冬（一九一六――一七年）を私どもはチュリツヒで暮してゐた。不愉快な生活であつた。ロシアとの連絡は杜絕し、手紙も來ずロシアからの人々もやつて來なかつた。たゞ毎日――

その後戰線で仆れた若い愛すべき同志グリイシャ・ウシエヴィチが、亡命者食堂へ行きがけに一寸立ち寄つた。朝ごとに、可なり規則的に、飢餓がもとで發狂したゼムリヤチクの甥が、私どもの所へやつて來た。私どもは、或スイス勞働者の家に部屋借りをしてゐた。その部屋はあまり氣に入つたものではなかつた。古い、陰氣な、十六世紀時代の建築かと思はれるほどの家――この家の一部にはソーセエジ製造場があつて、門内から我慢のならない腐つた臭ひがおそつて來たので、窓は夜中だけしか明けることが出來なかつた。しかし私どもの住居はほんとうの「インタナショナル」であつた。主人は二つの部屋を占め、大工と靴屋とを職業としてゐた。一つの部屋にはドイツの兵隊――パン燒の妻君が子供と一緒に。次の部屋には何をするのか判らぬイタリイ人。第三の室にはオーストリーの役者が、素敵に綺麗な赤猫と一しよに。第四の部屋に私ども――ロシア人が住んでゐた。何の愛國主義（ショヴィニズム）の臭ひもなかつた。ある日私が臺所で主婦と一緒に肉の一片をガスひちりんで燒いてゐる時、主婦が憤激して――「兵隊たちは自分の政府に××××××××！」とさけんだ。それ以來、イリイッチは特に愛想よくその主婦に向つて挨拶のお辭儀をした。

『残念なことにはスイス社會主義者の××的氣力は此一勞働者の妻君にも劣つてゐた。イリイッチは或る日、近くの小さなカッフエ「ズム・アビレル」で集會を始めた。數名のロシアとポーランドのボリシェヴイキとスイス社會主義者、そくばくのドイツ人、伊太利の青年などの集まりであつた。最初の集會には何でも四十人ばかり集まつた。イリイッチは自分の對戰意見と、プロレタリアを裏切り、實行プログラムを無視した首領たちを攻擊する必要を述べた。外國人連中は皆なインタナショナリストであつたに拘らず、イリイッチの徹底的な態度にしりごみした。一人のスイス青年團の代表者は「額をもつて壁を破ることは不可能だ！」――と言つた。この集會が雲散霧消に歸したのは事實である。第四回目の集まりは、ただロシア人とポーランド人が顏を見せたゞけであつた。しばらくの時間を漫談に過ごして、めい〳〵家路についてわかれた。

けれどもプラッテンや、ミュンツェンベルグ等と最も密接な連絡が出來たのはこの時代である。

それから少しのちに一つの劇的場面があつた。ある時、私どもはチユリツヒの繁華な町へ出かけて、思ひがけなく當時左派に傾いてゐたチユリツヒ社會黨新聞の主筆ノブス氏にめぐり逢つた。ノブス氏はイリイッチを一瞥してすぐ電車に乘りたい容子をみせた。イリイッチは、それに

かまはず彼をつかまへて堅く着物のボタンをつかんで、自分の意見――世界××の避けがたいことを述べはじめた。この執拗なロシア人からどうして摺り抜けるかを知らない左翼日和見主義のノブス氏の姿はまことに喜劇役者であつた。が、ふるえ加減にノブス氏の釦をつかんで、彼を口説きつけやうと努力するイリイッチの姿は、私にはいたましい悲劇役者に見えた。――何故か私は、ロンドンの動物園でイリイッチと一緒に長い間檻の前に立つて眺めた、あの北極の白狼のことが想ひ出された――「すべての猛獣は時が經つとゝもに檻に馴れる。熊、虎、獅子など。けれどもロシアの北から來た白狼だけは決して檻に馴れない。晝となく夜となく檻の鐵柵に身をぶつける」と動物の番人が説明してくれた。ノブス氏を説得しやうと努力するのは白狼が鐵柵に身をぶつつけることを意味しないだらうか？

ある朝、いつものやうに圖書館へ出かけやうとしてゐる時、ブロンスキイがやつて來て三月革命のことを話した。イリイッチは茫然自失の態であつた。ブロンスキイが立去つた時、私どもはやゝ我にかへり、毎朝掲示板にすべての新聞が貼り出される湖水の方へ出かけた。

さうだ！　外電はロシアの革命を報じてゐた。

『イリイッチは躍りあがつた。彼はブロンスキイに、何とかしてドイツ經由でロシアへ行く方法を密輸入者に調べて貰ふやうに賴んだ。間もなく密輸入者はベルリンまで丈けなら伴れて行くことが出來る――といふことが判つた。しかし、この密輸入者は、パルヴス派と連絡があるやうであつた。ウラデミル・イリイッチは戰爭成金の社會主義愛國者に變節したパルヴスとは、どんな關係をもつことも欲しなかつた。他の途を求めなければならない。が、どんな？飛行機で飛んで行くことは出來る。射擊されたとしても何でもない。が、革命中のロシアまで搬んでくれるやうな魔術的な飛行機がどこにある？　イリイッチは夜どほし眠らなかつた。ある晩「どうだ、僕は啞のスエーデン人の旅券をもつて入國する」といつた。私は笑ひだした「駄目ですよ。それは夢の中でいふことが出來るだけです。夢がさめた時には……畜生々々、スエーデン人でないことを感づきやがつた……と後悔するだけです」といつた。それにしても、啞のスエーデン人の旅券で乘込む計畫は、飛行機に乘つて行くよりも現實性のあるものだつた。イリイッチは自分の計畫を書いて、スエーデンにゐるガネツキイに手紙をだした。が、それは何の効果もなかつた。スウイスの同志達の助力で、ドイツ經由の許可をうけることが出來ると判つた時、イリイ

ツチは即座にそれを決心して、問題をひとりドイツ政府とばかりでなく、ドイツの社會主義愛國者等と少しの拘はりもないやうにはつきりさせ、すべてを法律的に形式づけることに努力した。この決心には、勇氣を要した。祖國を賣る！　といふ非難攻擊が脅威するばかりでなく、ドイツがほんとうに通過させるかどうか？　彼等がボリシェヴィキを監禁しないといふことに何の信用もおけなかつた。その後、ボリシェヴィキのあとからおなじ方法でメンシェヴィキその他の亡命團體が歸つたが、第一の足を踏み出す決心は、誰しもつかなかつたのだ。ベルンから「問題は解決した。ドイツへやつて來てもよい」――といふ知らせが來た時、イリイッチは「すぐ次の列車で出發しやう！」――と言つた。發車まで二時間しかなかつた。私は躊躇した。「全家庭」を整理しなければならない。書物を圖書館へ返したり、主婦との勘定もしなければならなかつた――等々。「一人でお立ちなさい。私は明日……」「いゝや一緒に行かう」そこで「家庭」を整理し、書物を返し、手紙はやぶり棄てた。手近にある一ばん必要な荷物だけは取纒められた。――私どもはそんなに急がなくてもよかつたのである。丁度復活祭だつたので、我々の汽車の出發は少しおくれたのであつた。

ベルンの國民會館へはドイツ行きのボリシェヴィキ連があつまつた。私達のほかにジノヴィエアイネサ、アルマンド、ハリトノフ、ソコルニコフ、メヒツハカヤ等がゐた。ラデツクもロシア人に化けて汽車へのり込んだ。同志プラツテンが我々を送つてきた。途中では、我々はドイツ人とは一切誰れとも話をしなかつた。ベルリンの近くで、別の車室へドイツ社會民主黨の連中が乘り込んできたが、誰も彼等と逢つて話さうとはしなかつた。

我々は絶えず車窓から眺めてゐた。そして殆んど男氣の無いのに驚かされた。町にも村にも婦人と少年と幼兒ばかりが眼についた。

汽車中ではカツレツに豆を添えた食事が與へられた。ドイツではその他には何もないといふことを見せたいらしくさへ思はれた。無事にドイツは通過した。

ストックホルムでは演說會を開いて我々を迎へた。廣間に赤旗が揭げられてゐたといふ外、ストックホルムのことは良く覺えない。心は既にロシアに飛んでゐた。國境はフインランドの汽車で越えた。もうすべてが懷かしい「自分達」のものであつた。三等車の粗末な車室、ロシアの兵卒も素敵に親しみがあつた。少し經つとロオベルトはもう可なりな年配らしい兵卒に抱

かれて何かフランス語で喋舌りながら、彼の頸を抱えて兵隊から貰つたパスハ（復活祭の菓子）を喰べてゐた。我々の連中は車窓に吸つき通しでゐた。過ぎ行く驛々の歩廊には兵隊が菌のやうにたち列んでゐた。ウシエヴィチは窓をあけて「世界××萬歳！」と叫んだ。兵卒達は乘客を迂散らしく眺めてゐた。我々の傍を蒼白い顔をした中尉が數回通りすぎた。やがてイリイッチと私の隣りの空（から）の列車へ移つた時、我々の傍へ席をとつて彼と話し出した。中尉は防衛派であつた。イリイッチは自分の意見を主張した。車内へは段々と兵隊が集つて來て、間もなく一杯になつた。兵卒達は侵略戰爭にはつきりとした反對を唱へる人間を見て熱心に耳を傾けはじめた。一瞬に彼等の顔は緊張を加へて行つた。

ベロオストロフ驛でマリア・イリニチナ（レニンの妹）シャリャプニコフ、スターリン等は私に向つて女工達に祝辭を述べるやうに熱心に勸めたが、私にはもう凡ての言葉が失はれてゐた。何にもいふことが出來なかつた。同志達は我々と一緒に席について話しはじめた。ペトログラドに着いた。ペトログラドの大衆、勞働者、兵卒、水兵達は自分の首領を出迎へた。見渡すかぎり民衆の海、廣大な民衆の海。赤い旗、クロンスタット水兵の儀仗兵、ペトロパウロフスキイ

要塞の探照燈、芬蘭驛からクシェシンスキー宮殿までの電燈に輝やく道筋、裝甲自動車・沿道を護る男女勞働者の垣、イリイッチは裝甲自動車に擔ぎこまれたのだ。彼は何か演說した。』

三　ラデツクの追憶

レニン歸還の瞬間についての回想を終る前に、もう少しカアル・ラデックの物語りを聞かう。

『吾々はスウイスの汽車から、獨逸の汽車に乘替へねばならぬシャフハウゼンへ到着した。それは私の記憶に深刻に彫りつけられた燃燒的な瞬間であつた。ドイツの將校達が我々を待ちうけてゐた。彼等はドイツの手でロシアへ輸送される生きた「道具」を數へる場所――稅關の廣間へ我々を伴れていつた。約束によつて彼等は旅券を檢閲する權利は持つてゐなかつた。だから稅關では机の二た側へ男性と女性を分類した。我々の誰かゞ途中紛失したり、ロシアのボリシェヴィキがドイツの令孃に變裝して、ドイツ國境内へ革命の胎兒を生み落して行つたりしないためにである。(私は之をやり切る氣が充分にあつた。且つフォースタリイ人としてその權利をさへ感じてゐたが、イリイッチは反對した)我々は默りこくつて突立つてゐたが、それは非常に重苦

しい感情であつた。レニンは同志達に取卷かれて壁ぎわに冷靜に立つてゐた。我々は彼に檢閲官の眼が加へられることを好まなかつた。

レニンは旅行中休みなく仕事してゐた。讀み且つ手帳へ何かと書きつけた。その上、組織上の仕事をしてゐた。面白い事には喫烟家と烟草嫌ひとの間に鬪爭が行はれた。我々は車室內では烟草の烟に惱まされる幼ないロオベルトとレニンに遠慮して喫烟しなかつた。そこで喫烟家連は通常別の目的に使れる場所――便所へ喫烟室を設けやうと企てた。なく次から次へと人が集まつたのでレニンは紙片で通過證を作つて、平均に分配し、其の場所（便所）を利用する者は三枚、喫烟のためには一枚の切符を出すことになつた。此の問題からまた人類の生活に何れの要求がより多くの價値を有つかといふ論爭が起つた。我々はボエム・バウエルクの「効用の限界」の理論の專門家ブハリン君が居ないことを殘念がつた。

多分カルヽスルエだつたと思ふが我々を送つてくれるプラツテンが、列車中にはドイツ勞働組合委員會のヤンソンがゐて、レニンからの祝辭と、ドイツ勞働組合からの敬意を傳へたいと言つてゐると知らせて來た。レニンは、彼を「鬼婆あ」の所へ叩き出せと命じ會見を刎ねつけ

た。

汽車はフランクフルトでやゝ長く停車した。プラットホームには軍警の垣が築かれてゐた。急に其垣が破れ平和主義のロシア革命家が吾々の方へ雪崩れ込んできた。彼等の多くは兩手にビールをもつてゐたが、我々に犇々と詰めよせて「媾和が來るだらうか？　何時來る？」と貪ぼるやうに質問した。此の兵卒の氣分はドイツ政府があまり有利な立場におかれて居ないことを我々に示した。これ等の兵卒が全部シャイデマン派であつたといふことで此の氣分は一層意味があつた。全旅行中それ以外に我々は誰とも逢はなかつた。汽車が伯林に停つた時、プラットホームには私服巡査の垣が築かれてゐた。かうしてサスニ，ツに着き其處から、我々はスエーデンの汽船に乘つた。其處では、普通の形式通り身元調査表へ登錄を要求された。レニンは何か敵の作略ぢやないかと各自が匿名で署名する樣に命じた。これが後で喜劇的な失敗の種になつた。トレレボルグから無線電信で船客中にウリヤノフが乘つてゐるかと問合せが來た。それはスエーデンの港で、露國赤十字の代表と稱して既に數日間我々を待ちうけ、政府の無線電信を利用する事を許された吾々の同志ガネツキイからであつた。船長は

身元調査表によつてウリヤノフらしい名をもつた船客のないのを知つてゐたが、若しかしたら我々の一行中にウリヤノフ氏は居ないかと訊ねた。レニンは長いことスガ目を作つて船長を見てゐたが、結局彼がウリヤノフだといふことを白狀した。それからガネツキイに、我々が乘つてゐることが通知された。

トレレボルグでは我々は震駭的な空氣を捲き起した。ガネッキイは我々全部のためスエーデン風な前菜で飾られた晩餐を注文した。スウイスで鍊を御馳走と思ひ慣らされてゐた我々飢えた る群は、數々の前菜を盛つた大テーブルを見るや、蝗のやうに飛びかゝつた。その時まで前菜附のテーブルでは文明人だけを見慣れた給仕人に、空前の驚異を與へるほど最後の一片まで片づけた。レニンだけは何にも喰はなかつた。彼はガネツキイの頭から、彼の知らない事まで引ぱり出すやうに露西亞革命の凡てを知らうと努めた。朝、我々はストックホルムに着いた。スエーデンの同志、新聞記者、寫眞機が我々を待ち構へてゐた。スエーデンの同志達の前列へフロックを着た偉大なる「息の通つた木偶」――現在しやあ〳〵と共産黨を足蹴にしてブランチングの巣窟へ歸つてゐるカルレソン博士が進んで來た。が、當時、彼は、スエーデン左翼社會黨中の

重鎭として我々を迎へ、我々のために開かれた朝餐會で正直にして感傷的なストックホルム市長リンドハァゲン君と共に座長をつとめた。それから混雜と多忙のうちに日が經つた。レニンの出發前に、重要會議が開かれ、ストックホルムに定住してゐたガネツキイとヴォロンスキイ及びオースタリー臣民といふ所からペトログラドに行く事の出來ない私の三人が中央委員會の在外代表に任命された（此の任命はペトログラドから改めて確認される筈であつた）。レニンは諸外國にゐる同志と我々との連絡や、在露中央委員會との連絡方法等について忠告をあたへて出發した。』

四　「テーゼ」――プロレタリアの任務

四月三日の夜、レニンはペトログラドに到着した。同志たちは、彼が直ちに、今後何を爲すべきかについて意見を發表するやうに要求した。四月四日、彼はボリシェヴィキ派の集會で「革命的プロレタリアの任務」について演說した。彼は、自分の思想をわかり易くするために「テーゼ」を書いて、それを最初まづ、ボリシェヴィキ派の集會で、次いで、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの

聯合集會で朗讀した。(當時まださうした集會が催され、或る地方では兩派聯合の團體さへ殘つてゐた。)

このテーゼは、ロシア革命の全過程を理解し、當時のレニンの思想を知るために最も重要な意義をもつものである。茲にそれを採錄しよう。

テーゼ

一、我黨の對戰態度は、リヴオフ一派の新政府の下にあつては、同政府の資本主義性質によつて、ロシア側からする戰爭が言ふまでもなく××的、帝國主義的の戰爭であるが故に、「革命的國防主義」に對して些の讓歩をも存し得ない。自覺的プロレタリアは唯だ次の條件の下においてのみ、革命的防衛主義を實證する戰爭として同意しうる。

(イ)、プロレタリア及び之と結合せる農民中の貧窮分子の手へ××××(ロ)、口舌上に於てゞなく、事實に於て、あらゆる領土割讓の拒否。(ハ)、あらゆる資本的利益の完全なる××。革命的防衛主義に同意する廣き階級の大衆的代表者等は、單に戰爭を必要とするブルジョアジーの僞瞞に××されつゝあるに過ぎず、彼等の良心は侵畧のために行動するものではないから、

彼等に向つては熱心と忍耐とを以てその誤解を闡明し、資本と帝國主義戰爭との不可分的關係を說明し××××××××、戰爭を眞に民主々義的、非强壓的媾和條件をもつて終結することは不可能なることを立證すべきである。

二、ロシアにおける現時局の特質は、プロレタリア自身の政黨及び組織の不足のためにブルジョアジーに政權を與へた第一期の革命から、必然にプロレタリア及び農民中の貧窮階級の手へ××××××××××××過渡時代に立つてゐるといふ事である。

この過渡的時代は、最大の合法性（ロシアは現在世界の全參戰國中、もつとも自由なる國である）と、大衆に對する壓迫の缺如及び彼等の社會主義の最惡の敵たる資本主義政府に對する無意識的信賴とによつて特徵づけられてゐる。

我黨はこの新らしき形勢に應じ、空前の廣大さをもつて展開せる政治生活に目覺まされたばかりのプロレタリア大衆中に、新しき活動を開始せねばならぬ。

三、臨時政府に對しては何等の支持をも與へず、××のあらゆる約束が全然虛構なることを、曝露すること。

四、我黨は現在多くの勞働者代議員ソヴィエト内において少數であり、且つブルジョアジーの權威の下に屈服し彼等の權威を笠に着てプロレタリア階級を壓迫しつゝあるブルジョア日和見主義者の政黨たる國民社會黨、社會革命黨、國防委員會（チヘエゼ、ツエレテリ其他の）等の聯盟に對して薄弱きわまる少數なることを承認すること。

大衆に向つて、勞働者代議員ソヴィエトは×××プロレタリアの承認しうる唯一の政治形態たること、現政府がブルジョアジーの權威に追從する間は、我黨の任務は、只だ大衆の實際的要求に即しつゝ堅忍不撓、政府の政策的誤謬を解明するにある事を說明し、我々が少數派なる間は、我々は全國家××の勞働者代議員ソヴエトへの××××を宣傳すると同時に、大衆が經驗によつて自己倒錯から脫出するやう誤謬に對して批判と究明とを怠らざること。

五、勞働者代議員ソヴィエトより議會主義的共和制度への復歸は退步である。全國内の勞働者、被傭農民、及び農民の代議員ソヴエトの下から上までの共和國。（五十字削除）

全官吏を何時にても任免しうる條件の選擧制度を布き、其の俸給は優秀勞働者の平均賃銀率を超えしめず。

六、農業（土地）政策の重心を被傭農民代議員ソヴエトに移す。

全大地主の××××。

國内における全土地の×××。土地×××を當該地方被傭農民及び農民代議員ソヴエトに移す。貧農出身者に對する代議員ソヴィエトの議席配分。各大規模所領地（當該地方の事情と政治機關の認定とにより百デシャチン乃至三百デシャチン（一デシヤチンは約我一町歩餘）をもつて被傭農民管理の下に共同模範農場を創設すること。

七、國内のあらゆる銀行を全國民的國立銀行へ即時併合、及び同銀行に對する勞働者代議員ソヴィエトの監理の實行。

八、（略す。）

九、黨内に於ける任務。

（イ）黨大會の即時召集。

（ロ）黨の綱領改訂、主として。

一、帝國主義及び帝國主義戰爭に關し。

二、（削除）

三、時代おくれとなりたる綱領の最少限的修正。

（八）黨の名稱變更。

一〇、インタナショナルの更新。

××的インタナショナル、即ち社會主義愛國者（ソシアル・ショヴィニスト）及び「中央派」に反對するインタナショナル建設の提議。

（以下一千字削除）

一三　七月政變

七月事件

四月二十一日、ペトログラドの勞働者は、三月革命以後の資本家的政權と妥協することを欲せず、愈々秘密の間に我々の旗下に參集してきた。一九一七年の生活は、急激且つ深刻に、勞働階級の政治的自覺を成長させた。資本家達が勞働大衆を自重させた唯一の力は、一つは全破壞的紛亂の危險であり、他は近き將來に於ける憲法議會召集の約束であつた。七月に入つては勞働階級の不平不滿は愈々高まり、遂にペトログラードとモスクワに於ては勞働大衆がボリシェヴィキの要求を中心として政府に×××起ち、××の一部も亦これに××するに至つた。この運動はまだ立憲民主黨、メンシェヴィキ及び社會革命黨の支配を倒すほど强いものではなかつたが、既にボリシェヴィキの周圍には××××する力が發達し集積しつゝあることを語つてゐた。

其の間にも、立憲民主黨と社會民主黨の反動革命派は、此のボリシェヴィキの成長しつゝある力を擊滅することに焦心した。今日彼等は、我々が彼等のブルジョア的な虚報新聞を閉鎖したことを非難し、我々を暴壓者と呼んでゐるが、彼等が一九一七年にどういふ風に「プラウダ」を閉鎖したかを忘れてゐる。ひとり「プラウダ」を閉鎖したばかりでなく、多數の我黨の中央委員トロツキイ、カメネフ等を捕縛したではないか？　レニンは、一九一七年七月に書いた論文「憲法の幻想（イリュジョン）」で、此の遺り口を説明してゐる。

『事實の上で觀察しやう。七月二日、三日に運動は發展し、政府の無能、物價騰貴、破壞、進軍に憤激せる大衆は沸騰した。立憲民主黨は「總辭職」を弄び、社會革命黨及びメンシェヴィキに最後通牒を投げつけ、爲す所を知らない彼等に政權を托して去つた。

ボリシェヴィキは、七月二日、三日には進擊をさし控へた。それは「デモクラロド」（社會革命黨新聞）さへ承認した所である。七月三日の晩には、運動は極度に横溢した。然しボリシェヴィキは、「平和的且つ組織的」な運動を鼓舞する檄文を發した。七月四日の右派の煽動的射擊は兩派の犧牲を增大した。執行委員會の事件調査、日に二回の報告發表等の約束は空文的約束に了

つた。社會革命黨とメンシェヴィキは殆んど何事もせず、双方の死者の完全なる人名すら發表しなかつた。四日の夜、ボリシェヴィキは、進擊中止の檄文を發した。それは同夜の「プラウダ」に掲載されてゐる。然し、第一にその夜ペトログラードへ反動革命軍の進軍がはじまつた。(社會革命黨、メンシェヴィキ及び彼等のソヴィエトの召集又は同意によるものらしい、そして彼等は、勿論此の「デリケート」な點については今日までそれらしい氣ぶりさへ見せず、嚴重に沈默を守つてゐる)第二には、その夜士官候補生隊、及び軍司令官ポロフツェフと參謀本部の命令で行動した軍隊のボリシェヴィキ虐殺がはじまつた。四日五日にかけては「プラウダ」が破壞された。五日、六日には「プラウダ」の印刷所が破壞され、職工ヴォイノフが印刷所から「プラウダ」のゲラ刷を持ち出したといふ廉で白晝殺害され、家宅捜索、ボリシェヴィキの檢擧、××聯隊の武裝解除等が行はれた。……

社會革命黨とメンシェヴィキは、有ゆる自己の政策で自分達の手足をつなぎ合せた。二人三脚的な彼等は反動革命軍をペトログラードに呼びよせた。(或は呼びよせる事を忍んだ)。それは彼等を更に縛りつけた。彼等は嫌厭すべき反動革命の穴のどん底へ轉がり込んだ。彼等は怖る怖

るボリシェヴィキ「事件」の調査のために任命した委員會を解散した。彼等は卑劣にもボリシェヴィキを反動革命派に賣渡した。彼等は己れを低うして、「殺されたカザツク」の葬式の示威運動に加はり、かくて反動革命者の手に接吻した！

彼等は――束縛されたる人々である。彼等は穴の底にゐる！』

二　七月事件の教訓

此の七月三日、四日の勞働者の進擊に先だち、六月十八日には、戰線における總進出の布告が發せられた。私（ヤロスラウスキイ）は丁度此の時、ヤクツク流刑地からモスクワへ到着した。到るところの塀には政府の布告と檄文とをもつて立憲民主黨と白衞軍とが、ボリシェヴィキに對する反感をけしかけてゐた。

活動は困難であつた、彼等は虚構の宣傳を投げかけ、私刑に處し、新聞を閉鎖し、吾々を捕縛した。然し、それで××を停止する事が出來たであらうか。我々は愈々益々勞働者の不平不滿の高まるのを見た　多くの人々は我慢が出來なかつた。「××××起つ時ぢやないか！　××××

××××××――時ぢやないか？」といつた、名のあるボリシェヴィキのうちにさへ、街頭示威運動に際し、我々の旗下に集まる幾千の民衆を見て、かういふ考が閃めいた。

ジノヴィエフは、七月事件について、彼の著書「レニン」のうちに書いてゐる。

『諸君は一九一七年七月事件のレニンの役割を知つてゐるであらう。彼にはプロレタリアの××の問題は××の最初の瞬間から決つてゐた。問題はたゞ良き瞬間を選ぶことだけであつた。七月事件の際には、我が全中央委員會は、××の即時××には反對であつた。レニンも矢張りさう考へてゐた。然し七月三日に國民の××の波が高く〳〵あがつた時、レニンは羽ばたきした。タヴリチェスキイ宮殿の（議事堂）の階上食堂では、小さな協議會が開かれた。其處ではレニンとトロツキーと僕がゐた。レニンは笑ひながら我々に言つた。――「××××××××」そして、さらに彼はつけ足した。――「イヤ、いま××××ことはいけない。今は成功しない。何故かといへば、戰線の軍隊はまだ皆な我々のものだといふ譯にゆかない。まだリイベル、ダン、メンシェヴィキの別名に胡魔化されてゐる戰線の軍隊がやつて來て、ペトログラドの勞働者を××さいなむだらう！」と。』

レニンは、一九一七年七月に書いた別の論文「××の教訓」で七月事件の意義を述べてゐる。

『進軍（六月十八日）の命令は勞働階級大多數の意志を蹂躙したもので、資本家的××戰爭の事實上の復活である。故に進軍と共に、一方では×××××××××と軍權の×××ボナパルテイストへの轉移、他方では、大衆に對する强壓と、インタナショナリストに對する壓迫宣傳の自由の撤回、戰爭反對者に對する檢擧と銃殺とが始まることは避け難かつた。

もし五月九日が、社會革命黨とメンシェヴィキをブルジョアジイの鉄鎖をもつて勝利の戰車へ縛りつけたものだとすれば、六月十八日は、彼等を資本家の奴僕として繫いだのだ。復活された××戰爭の結果として、大衆の××は必然的に更に急激に成長した。七月三、四日は、彼等の×××の×××を惹起した。それは無論ボリシェヴィキが自重して、××を最も組織形式に改めることに努めねばならぬものであつた。

ブルジョアジイの奴隷として鎖をつけられた社會革命黨及びメンシェヴィキは、凡てに迎合した。反動軍隊のペトログラド移動にも、死刑制度の復活にも、勞働者と×××軍隊の武裝解除にも、檢擧、壓迫、裁判なしの新聞閉鎖にも。』

そこから如何なる教訓を抽出する必要があつたか？　此の教訓をレニンは次の言葉で明確に表現してゐる。

『ロシア××は、勤勞大衆にとつては、社會革命黨及びメンシェヴィキの裏切り的役割の明確なる認識と、如何なるものであらうともブルジョアジーとの協調の排斥と、×××勞働者側への決定的支持とを除いては、戰爭の銃の締木、飢餓、大地主及び資本家への奴隷化から救はれる途のないことを教へる。

×××勞働者に取つては、もし貧窮農民が彼等を支持するとすれば、唯だ、資本家の抵抗を××し、無償による土地××、完全なる自由、飢餓に對する勝利、正當にして强固なる平和に、國民を導くことだけが殘されて居る。』

四　農民、　××大衆の獲得

一「兵卒と土地」

臨時政府のボリシェヴィキに對する憎惡は、我黨が勞働階級の中に强固な支持を得たばかりでなくさらに農民と兵卒大衆――戰線の××を引きつけたことによつて一層增大した。まだ、後方の官廳には、火藥の臭ひも嗅がず戰線の慘禍の何たるかを知らない者等が多數にゐた。彼等のうちの多くは、戰の慘禍と死の野に仆れた勞働者大衆の鮮血によつて儲けを得てゐた。だから彼等は、「勝利の最後まで」――と叫んだ。然し戰線の××は、戰爭廢止を說く我々の言葉を熱心に聽いた。レニンがフィンランドを經てロシアへ歸つた當時、すでに兵卒等は、どうすれば此の帝國主義戰爭をやめる事が出來るかといふ彼の言葉に、貪るやうに耳を傾けた。

一九一七年四月十五日の「兵卒のプラウダ」第一號には、レニンの署名のある論文「兵卒と土

地」が掲載された。此の論文でレニンは、當時我々の農村には農民代表者ソヴェトが存在してゐない事を指摘した。何故にレニンが之を指摘せねばならなかつたか。當時政府の首腦にはケレンスキーが据つてゐた。言葉の上では常に農民の利益を考慮してゐた人民派として、彼及び彼の一黨は當然、農民ソヴェトの組織と、全土地を此の農民ソヴェトへ××する事から始むべきであつた。然しながら、我國の歴史は、勞働階級殊に勞働階級の政黨がこの歴史的使命を自己の双肩に負ひ農民を組織し彼等を大地主制度と大地主的資本家的政權に對する×××××導かねばならぬほど複雜な過程を取つた。レニンはその論文の中にいつてゐる。

『××の多數は農民から出てゐる。すべての農民は、如何に大地主が人民を壓迫し來り又壓迫しつゝあるかを知つてゐる。土地は當然農民及び農業勞働者代議員の地方ソヴェトが××せねばならぬ。如何にしてそれを達成するか。全ロシアに亘り、例外なく各村落に於て、都會における勞働代議員ソヴェトの範に則つて農民及び農業勞働者代議員ソヴェトを即時に建設せねばならぬ。若し農民及び農業勞働者が自から一致結合しなければ、若し自らが自己の享有せる運命を自己の手中に獲得しなければ、世界に於て、誰も彼等を援助せず、誰も彼等を農奴證文から

解放しはしない！　（以下百餘字削除）

農民、勞働者、××――それは國家に於て最大多數を占める。この多數は、全土地が速かに農民代議員ソヴェトの手に×××ことを希望してゐる。何人も××に對して妨害することは出來ない。若しも多數が良く組織されてゐたら！　（强固に統一されてゐたら！）、若しも多數が自覺してゐたら！　若しも多數が組織されてゐたら！

××よ！　全勞働者と全農民の統一を援助せよ！

××よ！　自からより强固に、より密接に協同し、勞働者と農民とを結合せしめよ！　汝等の手より×××××××！

その時――たゞ其の時こそ、人民は自己の土地を享け、人民は地主の農奴證文から脫出する！』

「兵卒のプラウダ」「塹壕のプラウダ」の如き我黨の新聞の中で、我々は公然、大聲に、戰線に苦惱する××に向つて、彼等の立場と××について我々の見解を告げ、帝國主義戰爭から××するための我々の方針を明かにした。そして此の我々の召集喇叭は、次第に××の大衆中における

喊聲となつた。最初、××代議員ソヴェトを選擧しはじめた當時は、多くの××は自己を社會革命黨やメンシェヴィキの色に塗り替へた。そして彼等は××と共に、人民に同情すると言つた。斯くて彼等の多くは××代議員ソヴェトに選ばれた。彼等は自分が戰線における××大衆の意思の表示者だと誇負した。我々は當時一歩は一歩と此の××代議員ソヴェトを獲得しなければならなかつた。闘爭は困難であつた。ボリシェヴェキに對する不信用は非常に深く植えつけられてゐた。殊に七月事件以後、我々がドイツ政府のために行動したといひ、我々が獨探だといひ、あらゆる虚構のお伽噺を流布して我々の影を黑くした。

戰爭の後に、我々が農民及び××大衆の注意と同情とを自己に引つけた第二の問題は、土地に關する問題であつた。四月十三日、タヴリチスキー宮殿に召集された農民代議員大會に關して、レニンは「プラウダ」に書いてゐる。

『第一の問題は――土地についてゞある。農村プロレタリアは、完全、即時、除外例なしの全土地の國民への××及び即時的地方委員會の××による土地××に同意する。然し、土地を喰ふことは出來ない。無數の農民の許に馬なく農具なく種子がなくては、「國民」への土地××は

何の効果もない。

急速に審議すべき問題は、大規模經營をして(之に對して最少限の可能ある場合にも)農業技術家と農業勞働代議員ソヴェトの指導の下に、最良の農具、最良の種子を以て、農業技術の最良の方法を採用しつゝ耕作を繼續せしめるために、實際的手段を講ずるといふ事である。

我々は農民にとつても、また農村プロレタリア及び半プロレタリアにとつても、營利的企業と資本主義の條件のもとに於ては、大衆の貧窮から人類を脱出させ得ないこと——社會的計算の大規模經營へと轉向せねばならぬことを說かねばならぬ。そして此の樣な轉向に適應する方法を以て大衆を敎へつゝ、大衆と共に學びつゝ、この轉向を實現せばならぬ。』

而して××代議員ソヴェト執行委員會は、メンシェヴィキ及び社會革命黨の作製した「レニンの宣傳は、右翼的なすべての反動革命的宣傳にも劣らざる有害なものだ」——といふ決議を採決したので、レニンは、此の決議に對して「吾等の見解」と題し、一九一七年四月十八日に立派な回答を書いた。曰く、

『實際に於ける我々の見解の相違は何であるか？　主として第三項に於ける「土地について」

――である。我々は、農民が、地方における農民自身の多數の決議により、兵卒のために穀物と肉の生産を增加しつゝ即時に全土地を××するがいゝ――といふ。臨時政府は、農民が大地主と「協調」するやうに、即ち三百の農民が一人の大地主と「協調」するやうに――といふ。此の問題について國民の多數が我々に加擔するか、或は臨時政府に贊成を表するかを觀望しやう！

臨時政府は、血のニコライが始めたと同樣に、戰爭繼續派である！

臨時政府は、國民の意思も問はず、臨時の發表さへもせず、彼等（帝制政府）によつて締結された秘密外交條約の確認派である！

我々は、そのやうな、戰爭に反對し、條約の確認に反對し、秘密外交に反對するものである。

我々は國民に――例外なしに凡ての國民に向つて、此の戰爭を、强制壓迫なしの、即ち除外例なしに凡ての國民と民族に自由を與へる眞の民主的媾和によつて終熄することを勸告する。

我々は、國民に對して、戰爭を眞の强制壓迫なしの平和に終熄させるためには、××が全體的に、完全に勞兵代議員ソヴエトの××××必要を主張するものである。』

二　全露農民代表者大會

一九一七年五月、第一回全露農民代議員大會が召集された。レニンは此の大會に公開狀を送り、再度之等の最も重要な點におけるメンシェヴィキ、社會革命黨及び臨時政府との意見の相違に觸れ我々の方針――大地主と資本家に對する勞働者及び農民の××××、プロレタリア××の方針を指示した。當時、尙ほ、農民は未だボリシェヴィキに反對の氣勢をもつてゐた事を認めねばならぬ。レニンに對して多くの者は極度の不信任をもつてゐた。敵は農民に向つてレニンに耳を籍さぬやうに誹謗した。農夫レペデフ君（トヴエルスカヤ縣、バルコフスカヤ村共同組合「曉光（ザリヤ）」）は、一九一七年ごろ彼等がレニンを如何に見たかを語つてゐる。

『――我々もやはり、ドイツがロシアへボリシェヴィキ列車を送つた、そしてドイツは彼等に金を與へて「戰爭廢止」を叫ばした、レニンはドイツ皇帝の密偵の首領だ。――といふことを聞かされた。

之について誰よりも一番我々に說敎したのは、社會革命黨である。曰く「ボリシェヴィキに耳

を籍すな。彼等は賣國奴である。彼等は「戰爭」に反對である」と。その時、我々は彼等に向つて「一たい彼等ボリシェヴィキは何者だ？　大地主の土地を××することにも反對か？」と質問した。

だが丁度その時、我々の村から出た勞働者の一人がやつて來て、我々に向つて「レニン君は正しい戰爭反對者である。レニン黨は全土地の農民への卽時××の賛成派である。他の黨派はそれを欲しない。土地は金と引換へに與へたいのである。それも直ぐにではなく、憲法會議を召集した後にとある……と說明した。』

更に一人の農夫ボターニン君は（ウラル州、スモリンスキイ村）は、矢張り當時のレニンについて、回想して云つてゐる。

『一九一七年の形勢は、農民にとつて何だか判り難いものであつた。最初レニンの名を聞いた時は、我々は彼を疑つてゐた。が、ウラデミル・イリイッチが、土地を、其の土地の上で自分の額に汗して働いてゐる者に與へるために、大地主と資本家と戰つてゐるといふ事を聞いた時——その時から彼に對する我々の信賴は增しはじめた。』

三　レニンの演說

當時、第一回全露農民代議員大會の代表者に對する公開狀のうちに、レニンは書いてゐる。

『全土地は當然國民に××てゐる。有ゆる大地主の土地は、當然代償なしに農民に××らるべきである。それは明白である。爭點は、農民は、大地主に對して如何なる賠償金も與へず、憲法會議を待たず、即時に各地方に於て全土地を××すべきか、或は然かすべからざるかにある。

我黨は、然かすべしと考へてゐる。そして農民に向つて、其の地に於て、出來るだけ組織的に、決して財產の毀損せず、穀物と肉の生產を增大するために全力を注ぎつゝ――でなければ戰線の兵卒は恐ろしく困窮するから――直ちに全土地を×××××ことを勸告する！

土地の豫備的支配はたゞ其の地の役場だけが有しうる。畑の蒔付は必要である。其地における農民の多數は、充分組織的に土地を支配し、全土地を耕やし、蒔つける必要がある。それは――戰線にある兵卒の營養を改善するために必要だ。故に、憲法會議を待つことは出來ない。

それから全土地が勤労者の手に××されるためには、都市労働者と貧農(半プロレタリア)との密接なる結合が必要だ。此の結合なしに資本家に勝つことは出來ない。もし彼等に勝たねば土地を人民に××する事もできず、國民的貧窮から脱出する事もできない。土地を喰ふ事は出來ぬ。一文なし資本なしでは何處からも農具、家畜、種子を求める事は出來ぬ。農民は資本家にも富裕な百姓(ムチク)(矢張り資本家である)にも信頼してはならぬ。たゞ都市労働者にだけ信頼せよ! 貧農はたゞ彼等との結合のうちにのみ土地も鐵道も銀行も工場も全勤労者の所有×××とさせることができるのだ。此の事なしには、たゞ人民への土地××だけでは、缺乏と貧困とを取り去ることは出來ぬ。

第二の問題は——戰爭に關してゞある。

此の戰爭は——××的のものである。それは有ゆる國々の資本家が、自己の××的目的のため、自己の利益の擴張のために行つてゐるものだ。勤労的國民のためには此の戰爭は、如何なる場合にも、死と荒廢の慘禍、人類の野獸化の外には何物をも齎らさず、また齎らし得ない。故に我黨、自覺ある労働者の黨、極貧農民の黨は、徹底的且つ無條件に此の戰爭を排擊し一國

の資本家が他の國の資本家の前に××することを拒絶し、如何なる國民の資本家をも支持することを拒絶し、有ゆる國々の資本家の××、有ゆる國々の勞働者××の結果による即時の戰爭終結に努力しつゝある。

我々は國家の全××が、下から上まで、全體的に、例外なしに、勞働者、兵卒、農民のソヴエトに屬する共和國を要求する。

勞働者と農民は、住民の多數である。××は當然彼等の手にあるべきもの、地主の手にも資本家の手にも有るべきものではない。

勞働者と農民は住民の多數である。

××と××とは當然彼等のソヴェトの手になければならぬ。

農民代議員諸君よ！　これが我々の意見である。經驗はやがて、國民の大衆に、人民派及メンシェヴィキの誤謬を曝露すべきを強く確信する。經驗は間もなく、資本家との協調によつては壞滅の淵に臨むロシアを救ふこと――ドイツに於ても他の國に於ても、戰爭に苦惱する國民を救ふことは不可能だといふことを、大衆に示すだろう。有ゆる國民を救ふものは――たゞ全國

×××の、直接住民多數の手へ×××だけである。』

一九一七年五月二十二日レニンが演說した此の第一回全露農民代議員大會は彼を冷淡に迎へ、そして彼を熱烈に送つた。多くの者は彼を知らなかつた。幹部席にはメンシェヴィキと社會革命黨——企業者が坐つてゐた。レニンは地主や資本家と協調するメンシェヴィキと社會革命黨の方針を反駁し、痛切な演說を試みた。殊に彼は、「自分勝手な土地の奪取は無政府狀態に導くから地主と自發的に協調した方がよい、戰線の兵卒は自發的協調に同意してゐる」——と說いた敵黨の論據に猛擊を與へた。レニンは反問した。

『何故に戰線の××は、地主が自發的協調の形式のもとに不利な條件を附けるのを危險視しないだらうか？　何故に彼等は、農民が多數によつて反地主的決定をするのを危險視するのであらうか？　これは解し難いことである。何故に兵卒は地主に對し、「地主の自發的協調」に對して深く信賴せねばならないか？』

農民への卽時土地××に反對した有ゆる論據を。レニンは地主的狡猾だ。——と呼んだ。彼は云ふ。

『地主は之れ以上に笞で支配することは不可能だと知つた。そして彼等は、ロシアに取つては新手の、しかし西歐諸國では久しく行はれてきた支配形式に轉じたのである。

これ以上笞を以て支配する事の不可能だといふことは――ロシアでは二つの革命が示した。それは彼等に――國民を欺瞞と追從で支配せねばならぬ、新形勢に順應せねばならぬ、チョッキに赤い徽章をつけねばならぬことを敎へた。それは嘘の皮であるとしても、然し「我々は……革命的民主黨である。どうぞ、たゞ御待ち下さい。そうすれば我々は諸君のために何んでもゐたします」――といはねばならぬことを敎へたのだ。

もし農民が、既に地主にでなく、共同の國民的土地に播種するやうになれば、彼等は直ちにより惡く播種するだらうといふ論據は、殊に農民を愚弄し、彼を僞瞞によつて支配せんとする計劃である。

繰返して云ふが、地主の私有制度は×××からざるものである。所有は尙ほ存在するが私有制度は存在しない。所有は一時的方法である。そして所有は毎年變更する。一塊の土地を賃借の形式で享有する農民は、土地が彼のものだと考へることは許されない。――土地は彼のもの

ではなく、×のものでもない。土地は國民のものである。繰返していふが、之によつて今年は畑の播種が惡化するかも知れぬが、次の春にはそんな事はない。私の此の提議は、不思議な空前のことのやうではあるが、決して異常なことではない。』

此の大會後、レニンは既に農民大衆に知られた。代議員達は村々へ——農村へボリシェヴィキとレニンについての報告をもち歸り、メンシェヴィキと社會革命黨が農民に注入したレニン獨探說を打ち消した。彼等はレニンに於て、勞働者と農民の完全なる解放、憎惡すべき戰爭の廢止、全×の勞働者、農民への××のための戰爭の指導者を見いだした。ボリシェヴィキは單に勞働階級のみならず、農民及び兵卒大衆の指導者となつた。

五　レニンの潜伏時代

一　沼澤地の草小屋

政府は此の演説に駭いた。我々が×××を計劃してゐる――と言つて、ボリシェヴィキの有力者をつけ狙ひはじめた。問題はレニンとジノヴィエフが監獄に行くかどうかといふ事にかゝつてゐた。最近オルジ・エヌキゼは私に談したが、――辯護士のソコロフがタヴリチスキー宮殿でレニンは煽動者(内應者)だといふ風説を流布した時、レニンは「僕は監獄へ行く。そして彼等の虚構を證明してやる！」と言つたさうである。然し同志達はそれは賢明な策ではないと引きとめた。ケレンスキー政府は、社會民主黨のシャイデマン、エベルト、ノスケ等のドイツ政府がドイツ共産黨員ロオザ・ルクセンブルグとカアル・リイプクネヒトを引裂いたやうに、きつとレニンを引裂いたであらう。一時かういふ交渉さへ行はれた。――若しレニンをペトロパヴロフスク要塞監獄へ

入れるなら、(ペトロパヴロフスク要塞監獄の守備隊は我々に味方してゐたから兵卒等がレニンに危害を加へることを許さないだらうと我々は信してゐた) レニンは自首するといふのである。然し、臨時政府は之に同意しなかつた。だからレニンとジノヴィエフは潜伏することになつた。潜伏は却つて良かつた。一週間の後、レニンはジノヴィエフに言つた。

『我々はどうしてあんなに愚劣だつたろう? 例へ一秒間でも彼奴等を信用して縛られて行かうと考へるなんて! 彼奴等とは用捨なき闘爭だ! ——他に方法はない。』

レニン隱匿の任務は、勞働者エメリャノフに與へられた。彼は當時のことを追想してゐる。

『七月三日の夜、僕の所へゾフイ君がやつてきて、黨中央委員會は僕にレニンと、ジノヴィエフ隱匿の任務を與へる——と通知した』

エメリャノフは初め、彼等を彼の住居のあつた「ラズリフ」驛までつれて行つた。レニンとジノヴィエフは秣置場になつてゐた物置の屋根裏に落つき、其處で日を送つた。彼等は人相を變へねばならなかつた。頭の毛も剃り、レニンは口髭と顎ひげを剃つた。が、當時其の別莊地は捜索に便利であつた。そこで斯ういふ考へが起つた。時は草刈期節である。彼等が草刈り男に化けて草刈り

場へ行つてはどうかといふのである。彼等はグリ〳〵坊主に姿を變へたので非常に草刈り男らしくなつてゐた。レニンもジノヴィエフも此の考へに賛成し「ラズリフ」の湖水の向ふの草刈り場へ出かけた。彼等は遙かに自由を感じた。其處へ行くには水上を四露里、更に約一露里半も森林を行かねばならなかつた。

其處の常住者たちは、勞働者——草刈人夫達であつた。彼等はレニンを靜かに生活させた。レニンの首には當時約二十萬ルーブルといふ巨額な金貨が懸けられてゐたので、有ゆる二本足や四本足の犬がレニンを狩り立て探し求めてゐた。その上、ブルジョア、メンシェヴィキ、社會革命黨の黨員たちの中には、レニンを「引き裂き」にかけやうと義勇隊を組織する者さへあつた。

此の「ラズリフ」では、掛小屋をつくり、それを上から秣で蔽ひ、棒に湯沸しをかけ——まつたく沼澤地の小屋住ゐであつた。

その草小屋がレニンの野戰司令部であつた。彼は其處から運動の指揮をつゞけた。同志達は非常な要心ぶかさで其處へ連絡に出かけた。エメリャエフの息子のコンドラチが彼等を小舟に乘せて湖水を越へ、小屋まで伴れて行つた。初め彼等は、泳いだり、草を刈つたり、それを搔き集め

たり、あまり不愉快な生活とは思はなかつた。

然し、其處でも彼等は全く安全とは言へなかつた。ある時、ジノヴィエフが狩獵に出かけた事から、危ふく大事が起らうとした。彼は、山番人と喧嘩した。番人は先づ第一に彼から銃を取上げそれから調書を作るために姓名を訊問しはじめた。エメリャエフはそれを知つて揉み消しに出かけた。彼はかういつてゐる。

『僕は初め、吾が獵師達がアクセノフ(山番)にどんな印象を與へたかを知るために出かけた。行くと直ぐたづねた。

「ミハイロヴイチ、俺んとこの勞働者の銃を取上げたのは君かい?」

「さうだ、俺だ」といふ。

「おい、ミハイロヴイチ、軍隊友達の間でそんな事が出來るもんかね? 俺達は四年も兵營で一緒に勤めあげたんだが、それでもまだ、君は俺の獵銃を取上げやうと云ふのかい?」

「何だつて俺が、獵銃がお前のだといふ事を知つてゐる? 彼奴ア芬蘭の木偶みたいな奴でロシア語を一言も喋舌りやがらねえ、俺が、どうしたんだ、何者だと聞いても返事しやがらねえか

らサ。」大した事はない、山番アクセノフは、單にジノヴィエフを僕の所に働いてゐる芬蘭人だと思つたゞけであつた、と判つたので、吾々はみんな安心した。』

二　芬蘭の寒村へ

レニンは此處で、毎日新聞を全部受取つ當て讀んでゐた。その頃、新聞ではレニンとジノヴィエフとの潜伏について有ゆる揑造記事を書いた。彼等を潜航艇の中で見たとか、飛行機で見たとか書くものもあつた。レニンはさういふ空想を、「豆道化」と名づけて心から哄笑した。レニンは毎日、殆んど論文を書いておくつた。

彼は絶えず××への準備を叫んだ。七月には、彼は今すぐ××を取つてはいけない！――と言つたが、コルニロフ事件後になつて彼は、勞働者を立遲れさせないやうにと急きたてた。メンシェヴィキと社會革命黨は、その後我々が、彼等の無能きはまる××を××した時、我々が、彼等と一緒に革命を成就するのを欲しなかつたと憾んでゐる。が、レニンは七月事件後に彼等に向つて同盟ではないが一種の協約を作ることを提議したに拘はらず、彼等はそれを拒んだ。彼等はプ

ロレタリア革命をブルジョアの勝利以上に畏れてゐた。だから彼等は勞働階級が彼等を投出すまではブルジョアジーとの取引に日を送つてゐた。

ガユロフ君は、當時レニンの送つた手紙の影響が如何に大きかつたか？　彼等が十月上旬に如何なる指命をレニンから受けたかを語る。

『十月初旬に開かれた我黨の區委員會のある會議で、ナデジダ・コンスタンチノヴナは僕を次の部屋に呼んで嚴秘のうちにイリイッチからのタイプライターでたゝかれた一片の手紙を傳達した。會議の後に此の手紙の內容を讀んで、僕は直ぐ翌日、區內の有力な同志、勞働者に、此の手紙を見せるために集まつてもらつた。七八名の同志達がやつて來た。此の歷史的文書の中でウラデミル・イリイッチは、ボリシェヴィキの××××の機會がやつて來た。××××××××××。それが九割九分まで成功する程度にケレンスキーの天下は自から傷ついてゐる。――と書いてゐた。その上、××の計劃まで書いてあつた。手紙を朗讀し了ると、お互ひに審かし氣に顏を見合せながら、長い沈默がつゞいた。』

十六　十月革命

一　メンシェヴィキの無能

コルニロフ事變後、いはゆる「民主々義者の協議會」がペトログラドで召集された時、レニンはメンシェヴィキ及び社會革命黨が革命的行動に對して無能力者だといふ事を力說し、我黨の中央委員會に書翰を送つて次の如く云つた。

「××××はもう澤山だ！　アレクサンドリア劇場（民主々義者の協議會はアレクサンドリア劇場で開かれてゐた）を××し、彼奴等無用の長物を全部追ひ散らし、そして××××××××すべきだ！」

當時、我黨の中央委員會はレニンに同意しなかつた。中央委員會の多數は、尙ほ時機尙早だと考へてゐた。彼等はメンシェヴィキ及び社會革命黨が、何とかして革命を遣り切るだらうと思つてゐた。レニンは其のころ既にフインランドに住んでゐた。秋の寒空と雨の中で沼澤地にはもう潛ん

で居られなかつたからである。

彼は、我黨中央員會の躊躇逡巡のため、事が失敗に歸するかも知れないといふことを觀て取ると、危險を顧みずペトログラドへ乘り込んで來た。そして即時×××を提議した。九月頃にはまだレニンは、より平和的な革命の進行が可能だと考へてゐた。論文「革命の任務」中に、彼はプログラムを述べて言つた。

『資本家とは如何なる協調もせず、××をソヴェトへ、平和を國民へ、土地を勤勞者へ、飢饉と破壞との闘爭、地主、資本家の反動革命との闘爭、××の平和的進展』――と。

此の論文中で彼は更に、

『如何なる力が×××××××？　それは――プロレタリア及び小ブルジョア大衆――主として農民の力である。』

と云ひ、また、

『ロシアは、小ブルジョア的の國である。住民の最大多數はこの階級に屬してゐる。ブルジョアジーとプロレタリアとの中間における彼等の逡巡と動搖とは避けがたい。たゞ彼等のプロレタ

アート×××××××、××の勝利が、容易に、平和裡に、急速に、且つ靜肅に得られるのである。實際問題において、これ等の動搖逡巡は我々にロシア革命の方向を敎へてゐる。社會革命黨やメンシェヴィキを勘定に入れて自慰的イリュジョンを描くな！　自己の階級的プロレタリア的な途に堅固に足を立てよ！　極貧農民の困窮と戰爭の慘禍――すべてこれ等は、大衆に向つてプロレタリアの方向の正しさとプロレタリア××の緊要さとを、愈々鮮明な形で示してゐる！』

彼はまだその頃、ソヴェトが××を自己の手に收めさへすれば、ロシアに於ては、まだ革命の平和的進展、――ソヴエト內における各黨派の平和的鬪爭、實際的經驗に依る各黨派のプログラムの修正、一黨の手から他黨の手への政權の平和的轉移――が可能であると考へてゐた。

が、同時に彼は、革命は間もなく更に困難な途に立つだらうといふことをも豫見してゐた。彼は、我々の鬪爭の未來の構圖を描いて、

『若しも此の可能性が逸せられるとすれば、××進展の全行路は、四月二十日の運動よりコルニロフ時代に至るまでのやうな、ブルジョアジーとプロレタリアの間の最も激烈な市民戰を避

けがたきものとするであらう。（以下百五字削除）

それは、地主資本家及び彼等に同情する將校等の幾百幾千の生命に値する流血的なものとなるかも知れぬ。プロレタリアは××を完成するため、既定プログラムの遂行のためには、如何なる犧牲の前にも躊躇しない。が、若し彼等が平和的革命進展の最後のチャンスを見せるとすれば、プロレタリアは全力を盡してソヴェトを支持するであらう。』

當時、大きな危險が存在してゐた。ケレンスキー政府は自己の立場を救ふために、ペトログラドをトイツ軍の手に渡す考へであつた。その計劃は誰もよく知つてゐた。レニンは急遽我黨の中央委員會、ペトログラド委員會、モスクワ委員會に書を飛ばして、

『何故に、特に今直ぐボリシェヴィキが××××せねばならぬか？　豫定されたペトログラドの明渡しは我々のチヤンスを百倍も惡化するからである！

國民はメンシェヴィキと社會革命黨の逡巡動搖に疲れてゐる。たゞ我々が×××勝ちさへすれば、農民は我々に引つけられる。問題は×××「×」×××××、狹義の意味における「瞬間」にあるのでもない。その事はたゞ勞兵大衆に接觸してゐる者全體の聲だけが決定する！

問題は、黨の任務を明確に決定するといふ事にある。ペトログラド、モスクワ（州を含む）××××××××、××××××、××××××を計劃する事である。』（以下百二十餘字削除）

レニンは農民の氣運がいかに×××あるか、其の波が如何に高く〳〵上りつゝあるか、我黨の周圍には如何に犇々と×××××××××××における共鳴者の隊列が成長しつゝあるかを觀取したそして彼は、我々が機を逸しはしないかを虞れた。

二　露曆十月二十五日（十一月七日）

レニンは十月初めに「危機は熟せり」――を書いた。彼は「××の直前」についての問題を仔細に究明し、農民がケレンスキー臨時政府に對して反抗の必要に迫られ、またケレンスキーは、この農民運動鎭壓の必要に迫られてゐるといふ事に、最も大きな注意を向けた。都會の小ブルジョア階級は、社會革命黨とメンシェヴィキから去りつゝあつた。モスクワ區會改選では、六月に於て社會革命黨及びメンシェヴィキに與へられた七〇％の投票が、九月には一八％に落ちた。レニンは斷案を下して云つた。

『危機は×××。ロシア全××の未來はカルタの上に賭けられた。社會主義國際勞働者××の全未來はカルタの上に賭けられてゐる』と。

レニンは、黨の中央委員會が尙ほ躊躇してゐるのを見て、我黨の二つの最大團體――ペトログラド委員會とモスクヴ委員會に向つて次の書翰を送つた。

『××は――罪惡である。ソヴェト大會を待つことは――形式主義的兒戯である。形式主義に囚はれた恥づべき遊戯である。

×××××××××が不可能だとすれば、直ぐさま××に赴くべきである。標語――×××は土地は農民へ、平和は國民へ、パンは飢えたる者へ。勝利は保障されてゐる――九分九厘まで流血なしに！　手を拱いて待つことは、××の前には罪惡である。』

中央委員會の多數が政權の卽時×××××に反對したに拘はらず、レニンは遲疑逡巡する者を說服し納得させ、服從させて、自分の周圍に、徹底的な、勇敢な、如何なる難障害をも怖れない人々を糾合し得た。彼は百戰練磨の軍司令官の如く、どの程度の力が彼の手許にあるか、どれほど長く支へ得るかを計算した。彼は猪突はしなかつた。反對に、彼は眞劍に、飽かず政變の次

の日に起つて來る困難について考へてゐた。（以下四百餘字削除）

露暦十月二十五日（十一月七日）のやゝ前、既に彼は基礎的に、有ゆる我黨の將來の仕事の計劃――世界に於ても稀有の、ロシアの如き後れた國においては空前の、プロレタリアによる××と農民の偉大なる支持によつて行はれた××における、吾黨の全計畫を豫定してゐた。レニンは、堅固な手をもつて××の××と世界最初の勞働者國家の創造に向つてプロレタリアを指導した。此の彼の國家についてのは、彼の著書「國家と革命」の中に展開されてゐる。レニンが七月事件の後沼澤の隱れ家から拔け出し、芬蘭の寒村へ潜伏した時代に、其處で彼は他の仕事の隙に此の著述を書き終つた。（以下五十字削除）

若し、當時我黨が遲疑逡巡してゐたら、我々が言ふべからざる難境に立ち、重い〳〵犧牲を拂つたであらうといふことは疑ひない。レニンの天才的な透徹した達見は、我々にとつて、それ以上躊躇してはならない瞬間を適確に見極めることが出來た。我々は直ちに××××××收めるか、でなければ壓服されるかである。レニンは、鉄のごとき意志をもつて躊躇逡巡動搖する者を打ち碎き、有ゆる人々を一つの重要な任務に向つて集結することを得た。彼は四月はじめ首都に乘込

んだ當時、既に如何に力の集結をしなければならぬかを見た。彼は先づ、勞働者ソヴェトにおける多數の獲得、戰線及び首都における××大衆の獲得、逡巡動搖する農民の獲得の必要を見て取つた。彼は十月に於て、若しプロレタリアが決定的×××鬪爭に向つて前進せず、運動の指導的地位を自己の手に取らぬとすれば――××はプロレタリアの頭上を過ぎ、彼等は壓服される外なきことを觀取したのである。（以下四百字削除）

十月廿五日（十一月七日）に、首都における××は勞働代議員ソヴェトの手に移つた。

無論、レニン一人が十月政變を指揮したのではない。然し、何人も彼の如く明白に且つ正確に××を透觀することは出來なかつた。何人も十月時代におけるレニンのごとく堅確に、大衆を×××××へ導きはしなかつた。「レニン全集」のうちで、諸君はレニンのクロンスタットとの直通電話による談話を讀むことが出來る。レニンは、×××××の戰鬪部隊を、首都の堅めのために召集した。彼はバルチック艦隊の同志達と交渉し、彼等に首都の狀況を知らせ、且つ急速に多數の水雷艇その他の武裝船をペトログラドへ進發させることは出來ないかと訊ねた。バルチック艦隊からは「併し…それから何うする」と聞いてきた。レニンは――「それから何うすると訊ねる

代りに、進んで奮戰するといふ聲明を期待した」と答へてゐる。そして長ミハイロフ君が、彼に向つて、幾人々々の戰鬪人員を何處其處へ向つて出發させる事が出來ると知らせてきた時、レニンは折返して「そして君は彼等の給與と食糧を保證する事が出來るか？」と聞いた。レニンはかうした瞬間にも、單に指導者であつたばかりでなく、また指揮官であつたばかりでなく、××のために赴く兵卒の運命について、彼等のもとに食糧が充分であるかどうかを心配してゐた。（以下三十字削除）

一九一七年十月の××の勝利は、レニンが××××××機會を把握し、且つ力を一つに集結し得たからである。

新政權の第一の仕事は土地及び媾和に關する布告であつた。

十年が經過し、百年が經過する。然し幾世紀を經ても、此の偉大なる英雄的時代の物語を昂奮なしに讀むことは出來ない。深い〳〵昂奮なしに、此の土地と媾和に關する法令を讀むことは出來ないであらう。農民と地主との鬪爭は、長い世紀に亘つてつゞいた。貴族は、長い幾世紀かの間、幾百萬の自己の奴隷の頭上に座してゐた。十月革命の羽ばたきは、貴族階級を蹴散らしたの

である。帝國主義戰爭――は數かぎりなき人類の血を流した。人類の血と腦漿がヨオロッパ平野の泥土に混濁しつゝある時、一九一七年十月の、平和を呼ぶ我々の聲は、いかなる觀喜の響きを以て鳴り渡つたであらう。我々は、當時此の流血の愚を停止することは出來なかつたが、資本の犧牲となつて死に行くべき百千萬の人々を、その死から救ひ出すことは出來た。――それは、世界最初のプロレタリア××であつた。

十七　憲法會議の解散

今日、多くの若い同志達が、何故に我々が憲法會議の選擧を許し乍ら然る後これを解散したかを、理解するのは困難である。諸君は憲法會議についてのレニンの言葉、――憲法會議に對して陋劣に拘泥した社會革命黨にレニンが痛烈に浴せかけた言葉――を記憶するであらう。憲法會議の選擧の時まで、まだソヴェト政權が確立されてゐなかつたことも記憶するであらう。憲法會議には、有ゆる人々が選擧に參加した。が、ソヴェトへはたゞ勤勞者、勞働者、農民、赤衛兵だけが參加した。ソヴェトは土地法を發布し、媾和に關する命令を發布した。憲法會議の選擧が行はれる時には、各地方に於てソヴェト政權が創建されつゝあつた。

然し、國民の一部――農民を含む――は、尙ほ憲法會議の上に多少の期待をかけてゐた。憲法會議に對する候補者名簿は、まだ社會革命黨が權力をもち、ケレンスキー政府のもとに社會革命

黨が政權をもつてゐた時代に作られたものであつた。彼等は、地方に於ても其の政權を利用し、多くの地方で憲法會議を自己の掌中に把握するための組織をつくつた。選擧の行はれた時には、左翼社會革命黨は彼等から分裂してソヴェト政府に加入し、其の初期においてボリシェヴィキ――共産黨員と一緒に働いてゐた。然し、多くの地方の人民は、誰が社會革命黨の右翼であるか左翼であるかも區別がつかなかつた。人民はたゞ、社會革命黨も矢張りソヴェトの中に加つてゐるといふ事を知つたゞけである。だから「社會革命黨もソヴェト贊成派になつた」と判斷してゐた。ところが社會革命黨の憲法會議候補者名簿中には、左翼の名は殆んど無かつた。凡てケレンスキーの親友――言ひ換へればブルジョアジーの親友ばかりであつた。都會においては、勞働階級や少しく自覺ある者は、ボリシェヴィキー共産黨員に投票し、ボリシェヴィキは多數を獲得し、自覺的な貧農も矢張りボリシェヴィキに投票した。が、蒙昧な農民と富裕農民とは、社會革命黨に投票した。斯くて彼等は憲法會議に多數を得た。その時、彼等は既にソヴェト政權反對に傾いてゐた。憲法會議が召集されるや、同志スヴェルドロフは全露ソヴェト中央執行委員會の名をもつて憲法會議に對し、同會議がソヴェト政權をロシア國内の最高政權と認め、且つレニンが草案してソヴェト政權に依り

確認された土地及び媾和問題に關する布告を確認せんことを要求した。憲法會議の多數はそれを肯んじなかつた。その時、我々は、社會革命黨が憲法會議を反ソヴェト運動の指導中心たらしめんとしてゐる事を明白に知つた。で、我々は、それを許す譯には行かなかつた。これが、憲法會議解散の原因である。

此の瞬間から、憲法會議派は、さらに猛烈に反ソヴェト政權運動をはじめた。彼等はチエック・スロヴァク軍と通謀し、當時まだロシアに殘つてゐた聯合國の大使——英國のブカナン、佛蘭西のヌランス等を通じて、英國、佛蘭西、亞米利加、日本の諸政府とはかり、クラスノフ、カレヂン、デニキン、アレクセエフ、コルチヤック等の將軍連と共謀して、獨逸軍がロシアの心臟に迫るのを機會として恐ろしい反ソヴエート政權の進擊をはじめた。

その後我々の敵は一再ならず「憲法會議の政權を承認しろー」といふ要求を我々に提起した。ある地方では、農民は此の政權が何んなものであつたかを具さに經驗してゐる。サマラに於て、それからウフアに於て、社會革命黨はお手製の憲法會議を召集した。歷史は——市民戰爭時代にあつては、ブルジョアジーの獨裁か、然らずんばプロタリアの××以外には、途の無いことを證明

した。勤労者の大多數は、投票によつてゞはなしに、赤衛兵の隊列中に立つて銃を執り、破壞と飢餓と限りなき流血の犧牲をもつてする闘爭によつて、彼等がプロレタリアの味方であり、勞農政權の味方であることを證明した。然し、此の政權を維持し、擁護するためには、一時的の退却をせねばならなかつた。

當時、我々の前には媾和問題が、避けがたきものとして横はつてゐた。而して、その狀勢――その力の對立において、屈辱的なブレスト媾和以外の如何なる媾和をも達成することは不可能であつた。

この媾和のために、最も多く、最も强く、最も執拗に攻擊をうけたのはレニンである。

十八　ブレスト媾和

一　左翼小兒病

レニンは、最大の困難は×××後に始まるといふことを正確に豫見してゐた。そして、その困難は、既に革命の第一日から現はれた。

今になつて、ロシアの勤勞大衆、勞働者、農民が經驗した數年間を回顧する時、我々が克くもそれに堪え得たことだと思はれる。勞働者や農民達がかくも大きな犧牲に堪え得たのは、彼等が究極に於て自己の事業を防禦するといふことを自覺してゐたからである。彼等は非常な犧牲をもつて十月革命を闘ひ取ることに邁進した。その犧牲の上に、更に、ソヴェト共和國擁護のために齎らされた新たな犧牲が加はつた。そしてこの犧牲的精神のうちに、レニンが第二回全露ソヴェト大會で述べた眞の力が發揮されたのである。彼は媾和について説明するにあたつて、彼が國民

の力を如何に考へてゐるかを明かにしてゐる。

『我々の力に關する解釋は別のものである。我々の見解によれば、國家は大衆の自覺によつてのみ強い。國家は、大衆が凡てを知り、凡てについて判斷し、そして凡てに向つて自覺的に進む時、その時に於てのみ強い。我々は疲弊困憊について國民に眞實を打明けることを少しも恐れることはない。現在何處に疲れざる國家があるか。如何なる國民が疲勞を公言してゐないか？

伊太利を見よ！　其處では長い間疲勞のために戰爭廢止を要求する革命運動があつた。獨逸では戰爭廢止を標語とする勞働者の大衆的示威が起つてゐないと言へるか？　ウイルヘルム及び彼の配下の刑手によつて無慘に鎭壓された獨逸艦隊の叛亂は、疲弊から起つたのではないのか？若し獨逸のごとき秩序整然たる國でさへ、疲勞を口にし、戰爭廢止を口にし始めるやうな現象があるとすれば、我々が公然これを口にするのは、少しも畏れる必要のないことである。』

だが、聯合國政府は我々の媾和提議に應じなかつた。彼等は「勝利の終局まで」――戰爭をつゞけた。我々も矢張り此の戰爭を「勝利の終局まで」繼續すべきであつたらうか？　若し我々がさうしたなら、我々はソヴェト國家を維持し得ず、他國に對抗する國內の資本家援助の仕事に引入

れられざるを得なかつたことは明白である。或はロシアは勝つたかも知れぬ。然しそれはソヴェト・ロシアではなくて、將軍中の何人かの――デニキンかコルニロフかのロシアであつたらう。我々は此の帝國主義戰爭からは當然脫出すべきであつた。そこで、ブレストに於て獨逸との交渉が行はれたのである。

これに就ては我黨內には非常に異論があつた。獨逸が我々に向つて强盜的要求を提示した時には、一般に非常な憤激を起した。然しそれと共に戰爭による國民の疲勞、農民の疲勞は、多くの地方で農民達が戰爭繼續に耳を藉さうとしないほど大きかつた。軍隊は戰線から、間斷なく「奔流」の如く脫出し、幾十億の軍需品を放棄し、敵前に戰線を曝して、續々と歸つて來た。如何なる死刑も、銃殺も、此の恐ろしい戰線からの洪水を支へることは出來なかつた。農民は、この上戰ふことに堪えられなかつた。

共產黨の一部――當時彼等を左翼共產黨と呼んだ、その中には最初のうちは我黨の中央委員さへも可なり多數にゐた――は、ブレスト媾和條約の調印は、革命の裏切りを意味すると考へた。それは獨逸政府の立場を安易ならしめ、獨逸における革命の××を長引かせるものだと言つた。

他方ではまた、獨逸が提議した様な媾和は、ロシアに取つて屈辱的な、當時の言葉で「卑劣」な媾和だと考へてゐた。左翼共産黨はブレスト媾和條約に反對して革命戰爭を主張した。時恰かも右翼社會革命黨も左翼社會革命黨も、メンシェヴィキも、立憲民主黨も、ブレスト媾和に反對したので、左翼共産黨は、首鼠兩端に陷ち込んだ。

左翼共産黨の最大の誤謬は、彼等が農民の疲勞を理解せず、それを勘定に入れず、××における農民の意義を誤算した點にある。

同志トロツキー君は、當時やはり特別の態度を取つた。曰く「媾和を締結せず、而して戰爭を行はず、だが、此の様な媾和條件には調印し得ない」——と言つた。然し、當時我々の軍隊は解隊し、對抗の能力を失つてゐた。政府の名によつてトロツキーは「我々は戰爭もしないであらう。」と聲明した。

レニンは問題をさうは見なかつた。彼は、我々が徒らに時間を費やせば、更により大きな要求を出す可能性を獨逸に與へる、吾々はどうしても「息拔き」を得なければならぬ、どうしても媾和に調印しなければならぬ——と考へた。我々はこの上堪へうるだらうか。此の異常な國民的疲

勞と農民經濟の荒廢のもとに、更にこの上にも戰爭を續けうるだらうか。

その後の歷史は此の問題でレニンの正しかつたことを證明した。殊に、彼は我々の誰よりもよく、農民の氣持、軍隊の氣持を理解し、且つ誰よりも良く他の國々における××の前途を透觀した點に於て、偉大だつた。彼は何故に、軍隊の解隊を行ふやうにと我が黨員を說いたのであるか。

一九一八年三月六日、共產黨第七回大會でレニンは言つてゐる。

『軍隊は――今やロシア國家機關の病める部分である。彼等は此の戰爭の重荷を負ひ得ない。我々がそれを早く解隊すればするほど、軍隊はより早く各自に營養を攝取する。まだそんなに重症ではない。そこで我々は理不盡な外交家の前で滿場一致軍隊解散の決議をした。これは妥當な行き方である。我々は、軍隊維持の期待は輕薄なる空想（自己倒錯）だと言つた。早く解隊すればするだけ、それによつて全體にわたる有ゆる機能の快復が早く始まるのである。』

我々は當時、社會××の日が西歐の天地に近づきつゝあると信じてゐた。それ故にこそ、退却はかくも苦しいものであつた。然し、レニンは我々を敎へ導いたのである。

『我々は退却をする勇氣がなければならぬ。苦い、眞實の言葉をもつて、「神よ、半崩れの退却を與へよ！」と言はねばならぬ。我々は秩序ある退却は望み得ない。神よ、半崩れで退却せしめよ。我々の機能の病める部分が少しでもいゝから營養を攝るために、僅かな時間でも獲得せしめよ。機能が全體的に快復すれば、病は征服しうる。病める機能が即時に病氣を征服し、逃げ出す軍隊を阻止することを望んではいけない。』

當時、レニンが言つたやうに峻烈なる眞實を直視する事は何人にも出來なかつた。革命に茫然自失せざる人間のみ、峻嚴なる眞實に即面し得たのである。彼は我々を甘やかしはしなかつた。我々の進むべき嶮路を我々の前に描き、そして我々を其の途へと導いた。

二　赤衛軍の編成

レニンは、此の退却を息抜きだと解釋した。彼は「如何に我々の立場が困難であつても、此の獨逸との戰爭を廢めさへすれば、各地に擡頭した國内の反革命との闘爭に力を割く事ができる」と言つた。また「我々は力の一部を經濟復興に割きうる。經濟復興なしには、我々は潰滅するだ

らう」と言つた。どうして之によつて息抜きができるかといふことは誰にも理解出來なかつた。

たゞ、後になつてレニンが正しかつたといふことが明瞭になつた。

我々は、新らしい軍隊を建設する必要があつた。古い軍隊機關は瞬時に破壞された。當時、私は、ムラロフ、ヴシリエフ、ベルヂン、シトロダフ、ポリャンスキイの諸君と共にモスクヴ軍管區で働いてゐた。それは苦しい時代であつた。盜み出され、持ち去られ、途上に打棄てられ、投げ出された軍用品を搔きあつめ、保管せねばならなかつた。舊軍隊の崩壞のうちに、新建設をせねばならなかつた。私が小著「新軍隊」を書いた時、軍事教授達や舊い帝制將軍達はそれを嘲笑した。當時まだ發行されてゐたブルジョア新聞は、我々が如何なる新軍隊をも建設し得ないだらう軍隊は一年にして建設されるものではない、少くとも十年を要する——と指摘したのを覺えてゐる。然し、我々の前には、ソヴェト國家を守護し、地主に反抗し、資本家に抵抗して鬪ひ、市民戰爭を行ふ能力のある軍隊を急速に建設するといふ任務が横はつてゐた。我々は赤衛軍を建設し、彼等を漸次に、舊軍隊から殘つた成るべく强固な部隊と混成させた。モスクヴでは最初の勞働者聯隊と師團とを徵募しはじめた。その後、白衛軍、チエツク・スロヴアク、カザツク等が、白派の

政權下にある地方で無數の農民を絞首し、鞭うち、銃殺し、斬り捨てた時、農民達は我が赤軍中へ流れ込んで來た。その時、レニンは我々に向つて「三百萬の赤軍を建設せねばならぬ」といつた。私は、或る同志達が、貧窮と疲弊の中で此の困難な任務を遂行し得るかどうかを疑つてゐたのを記憶する。

十九　左翼社會革命黨の叛亂

一　越えがたい溝渠

左翼社會革命黨は、十月革命の後に、ソヴェト政府へ――人民委員會議へ加入した。彼等の多くは最初から逡巡動搖してゐた。一方では革命への參加を欲し、他方では自己の純白な左翼社會革命黨的な着衣を汚すことを欲しなかつた。各種の小ブルジョア黨の運命は、革命と反革命の中間にふらついてゐた。

十月事變には、唯だサブリン等の左翼社會革命黨だけが革命に加擔した。死んだ赤軍指揮官ラチツキイの如きは、戰線の××と共に革命派に加擔したが、他の者は、左翼社會革命黨のチェレパノフの如くモスクヴ・ソヴェトの階上を右往左往し、インテリゲンチヤらしく手を振つて、ソヴェトから去ることも出來ねば、流血戰に參加することも出來ないと言つた。此の左翼社會革命黨のチ

ェレパノフは、一九一九年にレオンチェフスキイ横丁の我黨のモスクヴ委員會における共産黨演説會爆破に加擔した。革命の鎚と、反動革命の鐵床の中間に彷徨してゐた有ゆる小ブルジョア黨の行動は、結局に於て、革命を裏切り、革命の敵方となつた。左翼社會革命黨は全くそれを實證した。口先では——革命的修辭、實際では——革命の裏切り、それが彼等の常である。社會革命黨の多數は、誠意をもつて行動し、革命のために盡してゐるかに見えたが、實際はさうではなかつた。

左翼社會革命黨は、ブレスト媾和に反對であつた。第五回ソヴェト大會には千百六十四人の代議員が出席し、うち六十六%はボリシェヴィキ、共産黨であつたが、左翼社會革命黨は約三分の一を占めてゐた。當時我々はまだ彼等を非常に信用してゐた。私自身、當時軍務人民委員長の職にあつたが、左翼社會革命黨叛亂の直前に、サブリンの請求によりヴォログダであつたか、どこかの左翼社會革命黨の戰鬪義友團に多數の小銃を與へたことを覺えてゐる。また左翼社會革命黨のムラヴィヨフは、ヴォルガのチェック戰線に司令官をしてゐた。膝元のモスクヴでは、ツリョフ・スヴァチィテリスキイ横丁のヴェ・チェ・カ(非常委員會)には左翼社會革命黨のポポフが指揮する一隊

がゐた。つまり、ヴエ・チエ・カさへ左翼社會革命黨に護衛させてゐたほど、我々は彼等を信用してゐたのである。

左翼社會革命黨は、ブレスト媾和の破棄を我々に要求した。マリヤ・スピリドノヴは、第五回ソヴェト大會で、全露中央執行委員會農民派の名をもつて二時間に亘る演說を試み、人民委員會議が國民に內密で金とパンと織物とを獨逸へ送つたといふ樣な止め度なき白派的な囈語を吐いた。レニンが、此の煽動に答へるために起つた時、左翼社會革命黨は、騷擾と叫喚をもつて彼の演說をまぜ返し、言葉を與へなかつた。が、それは彼等に成功を齎らす所以ではなかつた。

一九一八年七月七日、左翼社會革命黨のブリュムキンとアンドレェフは、獨逸大使ミルバツハ伯を爆彈をもつて暗殺した。彼等は之によつて我々を獨逸との戰爭に引入れやうとした。ポポフの指揮する一隊の力をかりた左翼社會革命黨は、當時、ヴエ・チエ・カの議長をしてゐたゼルジンスキイ、モスクヴ・ソヴェト議長スミドヴィチ、郵電人民委員長ポドベリスキイ等を捕縛し、郵便電信を彼等の手に掌握し、各地に向つて人民委員會議の政權は彼等の手に歸したといふ僞電を發した。また此の電報で彼等は國民に向つて獨逸との戰爭を煽動した。

ポポフは二千人の手兵と八門の大砲と裝甲自動車を持つてゐた。社會革命黨はクレムリンに向つて砲火を開いた。

數彈はクレムリン城門内に落下した。然し、彼は誤算してゐた。一小隊の軍隊も彼等に響應して起たず、一人の勞働者も左翼社會革命黨擁護のために起たなかつた。七月八日になつて此の叛亂は終熄した。ポポフの一隊は、ウラヂミルスキイ街道を散々に敗走しなければならなかつたのである。

此の時、ペテルブルグと、西部戰線から左翼社會革命黨援助のために向つた三百人の武裝團體が捕縛された。ペテルブルグでは左翼社會革命黨の手で組織された戰鬪義友團が武裝を解除された。ヴォルガのチェック線にゐた軍司令官、左翼社會革命黨のムラヴィヨフは、左翼社會革命黨中央委員會からモスクワにおける叛亂の電報を受け、軍隊に對してモスクワへの進擊と、獨逸との戰爭を命令した。之によつて彼は、戰線を全然放棄し、チェック軍に進路を開いた。然し、彼を支持した者は僅かであつた。戰線の兵が彼を支持しないのを見るや、ムラヴィヨフは短銃をもつて自殺した。

二　左翼の裏切り

レニンは前にも、左翼社會革命黨に向つて、「若しも此の退却――ブレスト媾和の必要を理解し得ないと、彼等にとつて惡い最期が來る」と警告してゐた。一九一八年七月五日レニンは絶えず左翼社會革命黨が騷擾をもつて妨害した其の演說の中で、彼等に警告してゐる。

『若し左翼社會革命黨の中に、其の彼等らしい良心に陶醉して、屢々變節改論する人があつてもまた彼等が「我々はボリシェヴィキと仕事することは出來ない、我々は去らう」といつても、我々は少しも遺憾としない。かゝる時局――幾百萬の人々がパンに渴き、同時に他の者は前年の餘剩穀物を賣り惜みパンの相場を倍加し、國民は稀有の飢餓に惱みつゝある――かゝる際に去り行く社會主義者は國民の敵である。彼等は革命を壓殺する資本家の親友である。彼等に對しては戰爭だ、用捨なき戰爭だ。』

レニンのこの豫言ははたして適中した。黨内のより良き分子は我々の陣營中へ加はつたので左翼社會革命黨には殘滓だけが殘り、實際に於て何等の役割も演ぜず、無意識に或は意識的に我等

の敵に加擔してたゞソヴェト・ロシアに對する新らしい攻撃に役立つたゞけであつた。そして彼等は、レニンは獨逸軍隊を國内へ迎へ入れるといふ如き無稽の風説を流布し、我々がロシアを獨逸へ賣らうとしてゐるなどと言つた。

同志ラーリンは、レニンが一瞬間と雖も獨逸の猛烈な壓迫に對して動搖しなかつた事を語つて次の如く云つてゐる。

『ブレスト媾和後――ラーリン君はいふ――ロシアは獨逸（當時の强大なるウイルヘルム二世の獨逸）と經濟互惠條約を締結しなければならなかつた。伯林のロシア大使はヨッフェであつた。更に交渉委員として一九一八年の夏ブハリン、ラーリン、ソコリニコフがモスクワから派遣された。我々が獨逸人に對して全産業を國有化する筈であり其中には外國人に屬するものも含むと聲明した時、獨逸政府は絶對にそれを實行しない樣にとの要求を出し交渉決裂を以て脅威し、七月一日までに回答を要求した。事件は六月二十日のことで帝制獨逸が武力によつてその要求を貫くことは誰にも明瞭であつた――すべてはカルタに賭けられてゐた。

ウラヂミル・イリイッチは瞬時も逡巡はしなかつた。彼は獨逸の要求にかまわず直ちに國有

化法令を作製發表するやうに命令した。かくて、一八一八年六月廿八日の全工場、製作所、鑛業鐵道等の徵發令は發布された。ドイツ政府は七月一日以前に回答を得た。然し、それは彼等が得やうとした反對のものであつた。我々は數縣を割讓するブレスト媾和條約に調印した——然し、それは魂の伴はない、力を集結する時間を得る爲の懸引的讓歩であつた。が、我々は產業國有のプログラムを撤回する譯には行かなかつた。それはプロレタリア國家の根本思想を破毀することを意味する。後になつてルーデンドルフの回想記で明白になつたが、ウイルヘルム二世の軍團長等はロシアに對して軍事行動を起したが、獨逸自身の形勢の激變によつて、我々は獨逸との戰爭から免がれることが出來たのである。

獨逸軍隊をモスクヴへ引入れたといふ流說については、一九一八年七月十五日の全露中央執行委員會でレニンがした演說で明白になる。曰く、

『獨逸政府が、武裝した獨逸の大軍をモスクワへ入れるやうに要求して來た時、我々は、かゝる希望は如何なる場合にも如何なる條件を以てしても容れる事は出來ない、それは事實に於て外國軍隊のロシア占領だからであると答へた。』

二〇　レニンの暗殺——重傷

プロレタリア革命に對するブルジョアジーの敵意は、革命に破産した小ブルジョア政黨——右翼社會革命黨のレニンに對する敵意となつて現はれた。今日では歴然と判つて來たが、右翼社會革命黨は帝制派の將軍の手をかりてボリシェヴィキ共産黨員を一人殘らず殺戮しやうとした。が、それには彼等の手は短かつた。右翼社會革命黨のマスロフが全黨に向つて戰鬪義友團の組織を叫んだ時、集まつたものは千人の豫定の所へ數十人だけであつた。その時彼等は外國使臣と反ソヴェトの隱謀をはじめた。彼等はチエック軍を引張り込んでヴォルガ沿岸を占領させ、シベリア鐵道を掌握させて西伯利を隔絶し——シベリアの王座へコルチヤツクを座らせ、色々な帝制時代の將軍を援けて我々から穀産地、石油石炭地方を奪取させた。倉庫の破壞や燒打をやつた。そして我黨の有力な人物を暗殺することによつて黨を粉碎しやうと企てた。かくて若い天才的な共産黨員ヴォ

ロダルスキーは其の火の如き言葉を以て勞働者の心を燃やしながら右翼社會革命黨の手で暗殺された。社會革命黨は彼が勞働者演說會へ行くのを尾行して暗殺した。又、トロツキイの暗殺を企て彼の乘つた列車を爆破した。が失敗した——列車が違つてゐたのだ。古い我黨の同志ウリツキイを憲法會議解散と白派隱謀團取締の張本人なりとして暗殺した。ヤロスラヴリ、ムルマン、ウラデミルスキー等々の諸地方で彼等は叛亂を起した。將軍連の手をかりてウクライナ、クバン、ドン、西伯利、ヴォルガ沿岸を割取し、我々を海陸から包圍した。そしてロシアを締め殺すことが出來ると考へてゐた。就中、レニンは誰よりも彼等を畏怖させた。彼等は敵意をレニンの上に集中して彼をつけ覗ひはじめた。

一九一八年の夏は我々にとつて非常な難局であつた。飢餓は犇々と勞働者區域を締めつけてゐた。資本家リヤブシンスキイは「我々は彼奴等を飢餓の瘦手で締め殺してやらう」と揚言してゐた。我々は苦境を隱しはしなかつた。さうだ、何のために隱すのだ？　反對に我々は何時も困難な時にはそれを勞働者に訴へた。さうしてその點でレニンは我々の手本であつた。彼は多數の集まる演說會に姿を現はし勞働者や農民と言葉を交さずには生きては居られなかつた。彼は、勇氣

をもつて嚴然たる眞實をば勞働者に語らねばならぬと考へてゐた。

當時モスクワでは所謂ゆる金曜日演說會といふのが催されてゐた。金曜日ごとに（偶には別の日にも）モスクワで各區の大きな建物――劇場でも倶樂部でも――のある所では到る所で盛んな勞働者演說會が催された。入場は誰でも自由であつた――我々は誰も畏れはしなかつた。

八月三十日、さうした演說會が到る所で開かれた。私もその日バウマンスキイ區の元の「穀物取引所」の演說會場で演說するために出かけた。午後六時頃私が其處へ行つた時レニンは演說を終つて出口から歸りかけてゐた。多數の勞働者は敬愛の眼をもつて彼を取まいてゐた。レニンと私は二言三言ことばを交して握手して別れた。それから一時間半の後、彼が痛手を負ふて地上に仆れるとは思ひも及ばなかつた。

レニンは其處からザモスクワレツキイ區（モスクワ河の對岸）の元ミヘリソン製作所で開かれてゐる演說會へ向つた。其處で、右翼社會革命黨の女黨員ファンニ・カプランは、全勤勞階級が衷心から敬愛する、また勞農階級の敵のすべてが憎惡の的としてゐたレニンを暗殺するために待ち構へてゐた。彼女はブローニングを手にし、彈丸の尖端には毒藥を塗つて一擊のもとに敵の首

領を斃さうと準備してゐた。破産した、全く反動派の方へ裏切つた此の政黨的小人の小さな腦裡に――レニンの生命を抹殺しやうといふ考へが宿つてゐた。レニンの負傷の瞬間については、レニンを射撃したカプランを其場で捉へたミヘルソン製作所の勞働者イワノフ君が次のやうに語つてゐる。

『聽衆が演説會へ集まり始めた時、カプランも其の中へまぎれ込んで來た。私が彼女に氣づいたのは三四百人の聽衆の大部分は知つた顏であつたが彼女は見慣れぬ顏だつたからだ。彼女は昂奮したやうに、次から次へと何本も烟草をふかしてゐた。一見――破れた汚ない靴、黑いスカアト、頭は冠り物なしで、色の淺黑い、二十八九に見えた。薄い秋外套を着てゐた。同志の一人が、彼女は秘密宣傳員らしいと言つた。それから彼女は姿を消した。

誰もイリツチが來るとは知らなかつた。誰かゞ演説してゐる最中に聽衆の中から「イリツチがやつて來た」といふ動搖めきが起つた。彼が姿を現はすや、もう誰も他の辯士の演説をきかうとはしないので、直ぐイリツチが演説をはじめた。イリイツチの演説はチエツク軍が我々に對抗して起つた事變についてゞあつた。彼の最後の言葉は「我々全體は一つになつてチエツク

戰線の支へ木とならねばならぬ」……と言ふのであつた。

イリイツチは五十分ばかり演說した。彼が演說を終つた時、勞働者たちは「我々は一つになつて戰線へ行かう！」と叫んだ。雷の如き拍手がつゞいた。……イリイツチは演說を終ると何時ものやうに外套を引掴んで降壇しながら外套を着、鳥打帽子を冠るのであつた。そして出口の方へ大勢に圍まれながら歩いた。イリイツチが出口に近づいた時、彼の前には數名の勞働者、後からは多數の群集が續いた。出口の階段の所まで來た時、イリイツチの背後についてゐた黑海艦隊の水兵が躓いて轉んだので群集はそれに遮ぎられてイリイツチの後へ續くことが出來なかつた。イリイツチは十五六人の勞働者に取まかれ自働車の待つてゐた中庭の方へ出た。その時二人の婦人が彼に近づいて、麥粉を徵發されたことを訴へた。イリイツチは歩きながらそれに就て何か說明しつゝ自働車に近づき乘車口へ片足をかけた瞬間、彼の四歩ばかり前方に立つてゐたカプランは、突然つゞけざまに四發發射した。大恐慌が起つた。人々はさつと後へひいた。私は建物の中から飛出して自働車の方へ駈けよつた。イリイツチは感覺を失つて身動きもせずに仆れてゐた。二三人の勞働者が自働車のまわりに立つてゐた。イリイツチを自働車

に昇き乗せて直ぐクレムリンへ運ぶやうにした。其處には麥粉の問題でイリイツチに訴へてゐた婦人も負傷して仆れてゐた。皆な逃げ散つたので誰がイリイツチを射つたのか知ることが出來なかつた。丁度そこらに遊んでゐた子供――彼等は革命中に銃聲には馴れ切つてゐた――のお蔭で判つた。彼等は「イワノフ！　短銃をうつた女は電車の方へ駈けて行つたよ。」と叫んだ。

二六〇

私は門から駈け出すとセルプホフ通りの方へ走つて行く女を發見した。それを追かける私の後からは大勢の勞働者が續いた。追ついて引捉へた――それは演說會の始まる前に私の注意を惹いた迂散な女であつた。大勢の勞働者が駈けよつて來て、其の場で私刑――打ちのめさうとした。私はやつとの事で他の共產黨員等と共に之れを制して、彼女を取圍んでボリシェヴィキ本部へ伴れて行つた。』

イワノフ君が、レニンが感覺を失ひ、身動きもせず仆れてゐたと言つてゐるのは間違ひである。運轉手ギリ君は回想していふ。

『誰だかイリイツチを近所の病院へ擔ぎ込めと主張した。私は家へ伴れて行くことを斷乎として主張した。イリイツチは我々の話を聞いて「家へ、家へ」……と言つた。全速力でクレムリ

ンへ乘りつけた。クレムリンのイリイツチの住宅の玄關口へ自働車をつけた時、我々は三人で自働車の中から彼を援け起した。彼は我々に支へられて苦しさうに痛みを堪えて一言も言はずに自働車から降り立つた。我々は「擔いで行きませうか？」といつたが彼はそれを斥けた。さうして言つた「俺は自分で行く……」――それから私に向つて、「上着を脱がして吳れ、その方が歩きいゝ。」と言つた。私は靜かに上着を脱がした。彼は我々の肩に倚りながら廻り階段を三階まで上つて行つた。……』

運轉手と共にレニンをクレムリンまで附き添つて送つて行つたゴンチャロヴ女史は言ふ。

『……私はイリイツチに何處をやられたかと聞いた。彼は負傷個所の少し上の方を手で指し示した。私は自分のハンカチで傷口をしばつた。彼はミヘリソン製作所を出てクレムリンへ着くまでうめき聲一つも出さなかつた。表面彼は極めて輕傷だとしか思はれないほどシツカリした態度を見せてゐた。……』

最初は非常に重態であつた。銃丸は氣管を貫通してゐた。一彈は鎖骨に觸れ、他の一彈は頸を經て背筋の上部に達せんとしてゐた。銃彈は毒藥をもつて塗られてゐた。若しレニンが異常の健

康を持たなかつたら此の銃創に堪えはしなかつたらう。

數日間といふもの彼の病狀は全勤勞階級を心痛させた。レニンは助かるだらうか？――みな心配した。手術して彈丸を拔き出すのは――危險であつた。毒彈はその儘彼の體内に殘された。彼は死ぬまでそれを體内に殘してゐた。

レニンは勝つた。彼は此の重い銃創に堪へて健康を取り返し再び仕事についた。彼は病中にも時局の多難なるを知つてじつとしては居られなかつた。彼は政局を報告して吳れるやうにと、まだ寢臺の上に横つてゐるうちに、せがんだ。

昨今、醫師が彼の病歴を書くに當つて屢々この重傷のことを忘れてゐる。が、此の負傷が彼の生涯を何年ちゞめた事であらうか？　若しも此の負傷がなかつたら、我々はまだ何年かの後まで彼の力强い指導と輝やかしい思想に觸れる事が出來たであらう。誰か、それ以來レニンは特に用心深く身を隱してゐたといふものがあれば、それは間違つてゐる。その後も彼は同じ樣に自由にまた努めて勞働者の演說會へ出かけたし、勞働者や農民の大會などへも出かけた。私はそれからズツと後に、彼が演說會から徒步でクレムリンの自宅へ歸つて行くのを見た。それは第二ソヴエ

ト會館で演說會のあつた時である。私は何の護衛もなしに彼が歩いて行くのを見た。初め私はイリイツチが私に氣づかないやうに或る間隔をおいて蹤いていつた――彼は一人で靜かに歩きたいのかも知れないと思つたから。が、それから私は我知らず追ついて、談しながら、クレムリンへ歸つた。私は彼に「兎も角もあゝして一人で歩いては……」と言つた。彼は輕快な冗談まじりにそれに答へた。私はレニンといふ人間は、畏れることを知らない人間だと思つた。革命の中心地を歩きながら、彼は生れ故郷の町を散歩する如く感じてゐたらしい。

二　飢饉、食糧徵發

一　働かざる者は喰ふべからず

現在、多くの勞働者たちが一九一八――一九――二〇年の飢餓時代の生活を回想すれば、怖ろしい惡夢のやうであらう。八分の一斤、四分の一斤のパンを貰ふため長い間行列に立つた。一プウドの馬鈴薯をもとめるために溢れるやうな滿員の汽車の屋根といはず、緩衝機の上といはず揉みあひ、ぶら下つて田舍へ出かけ最後の一枚まで着物を賣り飛ばして食糧品に代へた。製作場へ出かけても、それは働くためではなく、機械を生產する代りに石油マッチ、小鍋、金鎚を作つて秘密に市場へ持ち出して賣り、誰でもが我知らず投機をやる樣になり、勞働者は都會の工場や製作所を逃げだして餓死を免れるために農村を彷徨して農民からパンを懇請した。それが此の時代の姿である。シベリヤ、ヴォルガ、ウクライナ、クバン――すべての穀產地は分割されてゐた。

――かうした條件のもとにソヴェト國家が土崩瓦解から免れるためには、ソヴェト政權の鐵腕が必要であつた。今では多くの人々は當時の法律と制度――全餘剰の徵發、飢餓的な現品給與、徵發のための交通遮斷隊の編成などを戰慄なしに回想する事はできない。誰がそれらを快く回想しうるであらう？　若し痛ましい本音を吐けば、それは「之によつてこそ勞農ロシアは救はれた。若し之がなかつたら滅びたであらう」といふ事である。

一八一八年の五月にレニンの所へプチロフスキイ製作所の勞働者代議員がやつて來て、ペトログラドの飢餓狀態について詳細に陳情した。この陳情がなくても無論レニンは當時の勞働者の飢餓狀態をよく知つてゐた。彼は、それに答へてペトログラド勞働者に與ふる書翰を書いて、今や現品配給法、全穀物の徵發なしには滅亡の外なしと指摘した。レニンは書いて曰く、

『我々は目のあたりパン其他の食糧品の投機業者の跋扈跳梁を見る。飢餓はロシア國内にパンが無いからではない。ブルジョアと全富有農が勤勞階級の支配に對する最後の鬪爭をやつてゐるからだ。ソヴェト政權にとつて、最も緊急な問題は――パンの問題である。ブルジョアジー及び全富有者――農村の富豪、搾取者はパンの獨占を圖り、働く者に先づパンを與へるためのパ

ンの國家的配給を破壞してゐる。ブルジョアジーはパンの投機を行ひ一プウド（我が一斗ばかり——譯註）の穀價を百留も二百留もに引上げてゐる。（當時の百留は金貨の四留以上にも相當した）そして正當なるパンの配給を妨げ、最初の社會主義制度の根底を築きあげんとする勞働者政權を締め殺すために賄賂、買收、請託をやつてゐる。——「働かざる者は喰ふべからず」——である。

「働かざる者は喰ふべからず」——それは如何なる勤勞階級にも明瞭である。全ロシア國民の九分九厘までは此の眞實に共鳴する。この簡單にして明白きわまる眞實は——社會主義の基礎であり、盡きせぬ力の源泉である。

然して、それ故にこそ、われ／＼は、決然としてそれを現實ならしめ得ねばならぬ。無數の人々が飢餓に惱む時（ペトログラド、非農業地方、モスクワ等において）——幾百萬プウドの穀物は、富豪、農村搾取者（クラアク）、投機業者の手に隱匿されてゐる。自から社會主義ソヴェト共和國と名づける國內にそれが行はれてゐるのは、有ゆる自覺ある勞働階級に取つて眞劍に深く考ふべき事ではあるまいか。

「働かざるものは喰ふべからず」――如何にそれを實行すべきか？　それが實行には第一にパンの國有、即ち有ゆる穀物の個人的取引の無條件的禁止、全餘剩穀物の國家への提供を義務とし何人も餘剩を隱匿保持することの嚴禁が必要だといふことは太陽を見るごとく明白である。第二に、其の爲にはパンの餘剩の嚴格なる計算、パンの産地からパンの缺乏地方への圓滑なる輸送、需要に對する準備の正確さ、刈取り蒔付等の管理が必要である。第三に、其のためには富有者に對して何等の優先權をも與へず、全人民の間における正當なるパンの分配をプロレタリア國家の管理のもとに行ふ必要がある。

ロマノフとケレンスキーは掠奪戰爭によつて徹底的に破壞された國をばロシア勞働者への遺産として遺していつた。パンは最後の一斤までを嚴格に計算することによつて、また均分的に配給することによつて辛うじて全員のために足りる。機械のためのパン――即ち燃料も極度に缺乏してゐる。若し嚴格なる節約に全力を盡さねば鐵道や工場が動かなくなり、失業者が殖え、全國民を締めつける事になる。カタストロフ（即ち滅亡）は我々の前へ近づいてきた――空前の艱難なる六月、七月、八月がつゞいて來る。

自覺的前衛勞働者が自己の周圍に貧民大衆を結合し鉄の如き秩序を立て、嚴乎たる政權、眞のプロレタリア××を確立し、搾取階級をして穀物及び燃料を國家的に正しく分配することを克服し得るか、――然らずんば、ブルジョアジーが、農村搾取者の援助や、また無性格的な空論家（無政府主義者及び左翼社會革命黨）の間接的援助のもとにソヴェト政權を轉覆し、そして國民に對し十六時間勞働を强要し、一週間に八分の一斤のパンを與へ、勞働者の大衆的銃殺を行ひ、芬蘭やウクライナでやつたやうな虐殺を敢てするコルニロフを引張つて來るかであらう。

『ソレでなければコレ――コレでなければソレである。

中間は――無い。』

二　パンのための十字軍

レニンは勞働者に向つて、彼等が大衆的に蹶起して食糧問題を解決するためパンの投機業、農村搾取者、秩序破壞者、贈賄收賄に對する「偉大なる十字軍の遠征」を組織することを求めたのである。

彼は「國民が飢ゆる時、失業者が洪水のやうに街頭に溢れる時、パンの餘剩を盜み、國家の燃料を掠める者は大罪人である」と云つた。

一九一八年六月四日、全露中央執行委員會及びモスクワ・ソヴェトの聯合會議において、レニンは再び全國に向つて「パンのための鬪爭」――の警鐘を打鳴らした。

『現在我々の前には全人類にとつての根本的な問題が横つてゐる、――飢餓を征服すること、少くとも直接的な苦惱たる二つの首都とロシアに於ける農業地方の十郡を襲つてゐる飢餓を卽時に輕減すること、これである。しかも我々は、各種の搾取階級の、色とり〴〵の反革命團體の反抗による市民戰爭の最中で、これを解決せねばならぬ。之等の搾取分子、反動的政黨はどうしても舊制度と絶緣して新制度に轉向することの出來ない分子である。」

反動革命派は飢饉を利用した。彼等は農民の間に叛亂を煽動し『ソヴェト政權を追拂ふのがいゝ、さうすればお前達の穀物に誰も手を觸れはしない」と言つた。』

富裕な農民達はそれに乘つた――彼等は後で、それを信じたお蔭で社會革命黨や白衛軍から酷い目に逢はねばならなかつた事を知つた。都會でも飢餓から不平と叛亂が起つた。我々にとつて飢

饉を征服することが卽ち反動革命の征服を意味することは明かであつた。レニンは食糧問題に絕大の意義を認めた。彼は自からそれの調査にあたり、委員會を任命し、細かい數字上の計算まで自分でした。さうしたパンの缺乏からは强制徵發の外にパンを得る方法がないといふ結論に達した。レニンは食糧戰線へむけて出發する勞働者の集會で演說し、彼等が農村へ行つてどう言ふべきか、如何なる態度を取るべきかを敎へた。又全露中央執行委員會議で彼は次の如くいつた。

『我々にとつては勞働者から構成される宣傳隊が必要だ。我々には非產業的區域たる郡部出身の勞働者が必要だ。彼等が郡部へ行つてソヴェト政權の宣傳者となり、我々の食糧戰爭を援け、我々のクラアクとの戰爭、秩序破壞者との戰爭を援け、彼等がそれを說明し社會主義的宣傳を行ひ、農村に於て貧者と富者との立場の相違を說き、農民の各自に我々の眞の力を知らしめる必要がある。また貧農をして、無數の搾取者を征服せしめる樣に宣傳する必要がある。』

我々に向つて反動革命が四方から進擊した時、その戰線で我々が血を流さねばならなかつた時——社會革命黨は演說會や集會で小氣味よげに言つた。「君達は平和を約束した、だが何處に平和がある？」と。勞働者達が意氣鎖沈し、婦人はパンの支給を得るための行列に押合つた時、社

會革命黨とブルジョアジーは「ボリシェヴィキは君達にパンを約束した、が、どこにパンがある？」と反問した。食糧徵發隊が列車を遮斷して捜索を行ふと彼等は「諸君は自由を約束した――これが自由か？」と煽動した。或る人々に取つては此の宣傳は利いた。我々にとつてさうせざるを得ないことを全勞働大衆や農民大衆に、說得するのは非常な難事であつた。食糧徵發隊は屢々秩序を紊し掠奪をさへやつた。レニンはそれを如何に見たであらう？　彼は「さうした事のある毎に我々は勞働階級が現在まだ古い掠奪社會の缺陷から脫却しないといふ事、因襲からは直ちには脫却し得ないといふ事を指摘するであらう」と云つた。

一九一八年七月の末モスクワにおける勞働組合及び工場委員會第五回會議でレニンは再び飢饉問題に就ていつてゐる。其處で彼は勞働組合會議に對して「堅固なる鬪士を結合せよ、彼等によつて多くの隊列を編成せよ、食糧問題のために、全富有民を家宅捜索するために鬪爭せよ、而して諸君は諸君に必要なものを獲得せよ」と言つた。

レニンに取つては食饉問題は他の問題におけると同樣、革命の祝福を保障するために外ならない。而して此の食糧徵發と徵發隊の派遣に際してレニンのもつてゐた規準は、徵發穀物の數字的